

明治三十一年十一月二十日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第貳拾號

第四高等學校北



北辰會雜誌第二十號目次

論說

政治と法律との關係

矢板 寬
吉田 堅治

史傳

菅公の片影(承前)

袋 川

雜錄

我國の神話

藤井 乙男

草蟲三聲

龍 眠 庵

殘燈落月錄

一 岑 生

蝙蝠集

松下花樵人

文苑

薄紫

松 風

松山の時雨

美島竹外生

月歌十首

花廼舍正義

和歌六首、俳句十五句

與發理事書

村上 函峰

栽金桂記

宮本 潮來

菊園雜記序

明石 中和

硯銘并序

石田 竹溪

詩九首

雜報

初見の辭、送迎新舊教官、卒業證書授與式、卒業生諸君を送る、望新入生諸君、時習寮茶話會、青年節酒會發會式、寸鐵、外數件

附錄

行軍記事(金石地方)

藤 紫 溟

弓術大會記事

義 夫

擊劍紅白勝負記事

霞 生

時習寮生 柔道紅白勝負概況

露 子

北辰會雜誌第二十號

論說

政治と法律との關係

教授 矢板 寬

夫れ國家あれば則ち法律あり法律は國家永遠れ意志にして國家は成立に欠くべからざる要具なり法律定りて然る後初めて國家の組織確定し國家の政治機關其活動を得て國家の統治初あて其効を奏するもれとと故に政治と法律との關係に付き國家一般の原則となすべき所は凡そ政治は法律に準據し如何なる政治と雖も法律に背戾すべからざるに在り

苟も政治にして法律に反する時は國家の成存を保とべからず法律に反する政治は國家の目的と相背馳し國家の秩序をして紛亂せしむるものあり法律を顧みざる政治の行爲は仮令其最初の目的は不正からざる雖も國運の進歩を妨げ文明の開進を害するものなり蓋し其行爲に於て法律を等閑視するの政治は國家の意志の尊嚴を犯し國家の法律の信用を害するものにして斯れ如き政治は到底永久民心を維持する能はず何時しつ亂階を生じ一國瓦解の不幸に陥かんとするに恐あるものなり然れば彼の Machiavelle が會て主唱せる便利唯是政治之標準なりと云へる主義の如きは其不適當

ある事固より明なり故に政治は總て法律の本意に準據し法律的に事を爲さるべからず斯の如く法律は國家の永遠の意志なるが故に國家の發動即ち政治は此一般永久の意志たる法律に

準じ進退を以て正當の順序となき事勿論かりと雖も此原則は實際上絶對無限の効力を有するものにわらず夫れ法律と雖も其實國家成立の一手段に過ぎずして法律は國家の究極の目的にはならず法律を以て國家究極の目的とするは則ち國家の方便と國家の目的とを混同したるもの、説にして國家は法律れ外に一個至大の目的を有するを知らざるものかり往古 Aristotle 及び Plato 等國家の目的を論じて國家の目的は唯正理を存する所を發揚執行するに在りとせり然れども是れ單に德義上の觀念より説を立てたるものにして國家は一個の政治的團體なる事を忘却したるもの、如し

抑も國家は固より正義を尊ばざるべからずと雖も之を以て直ちに其目的となすに至りては大に誤謬なき能はず正理執行を以て國家唯一の目的とせば其業務殆んど極りなく政治的、外の事にも亘らざるべからず然れども國家は一個の政治團體たる以上は便宜利益等思想をも有せざるべからず便宜は必ずしも正理と符號するものにわらず一般の便利の爲めには多少の正理を曲ぐる事なるとせず是れ固より正理に於て取らざる所ありと雖も而も國家は單に道德的の結合にあらず以上は亦已むを得ざる場合なきにあらず

Bentham 氏其立法論に於て論じて曰く國家は其生活を維持し其目的を全ふせんと欲せば國家は其身体の組織を保護すると共に又其精神の活動を自由にせざるべからず國家は正義公直を維持すると共に亦其便宜公益を計策せざるべからず國家は司法權の獨立を尊重すると共に又行政權の活動を拘束すべからず即ち國家は一面に於ては法治的機能をも有し又一面に於ては政治的機能をも有する

ものなりと

John 氏も亦其行政學第一卷に於て法律の性質を論せる中に凡そ世界れ法律は未だ曾て十分精密に實行せられたる事なく又到底十分精密に實行し難きものかり故に純然たる國家の意志即ち法律は其本質に於て外界れ狀態に應じ時々變易せざるべからざるものにして斯の如き變易の機能は之を法律れ執行機關に屬せしめざるべからずと云へり

故に前述の原則にも多少の制限を許さざるべからず若し法律にして國家の目的に反り國家の生存に不利ある事ありて之を固執する時は却て國運の進歩を妨害するに恐ある場合に於ては國家の目的の存する所を計り時機に投合する處置を施し得る變例を許さざるべからず此變例を辨せむが爲め左に六箇の場合を擧げて政治と法律との關係に付き聊か政治の本務を論ぜん

第一 凡そ法律は偶然の制作物に非ず必要に由りて生じ又必要に由りて變化し來れるものかり即ち法律は沿革的に生長し來れるものなるが故に法律は必ず時世の變遷に隨行すべきものなり抑も法律の本性 (Wesendes Rechts) は萬古不易ありと雖も法律の外形は永久不變のものにあらず Holendorff 氏の所謂る法律も亦一般の有機物の如く Generation を有するものなりと云へるは即ち

是れなり故に曾て極めて必要ありし法律も時世の變遷によりて不必要とある事あり例へば彼れ士族平民との間に於て權利義務の關係を異にしたる法律の如き徳川時代に於ては當然の必要ありしも今日より之を見れば殆んど愚かるが如し

斯の如き陳腐に屬したる法律も猶之を尊重固守せんとするが如きは國家の氣運の進流に逆ひ國

家の發達を害するものなり故に斯の如き場合に於ては時勢の變遷と人事の更迭とに適應して政治の方針を定めざるべからず蓋し政治は目的は國家の氣運の進歩に計るにあるものにして國家は發達するに隨ひて過去の舊慣古律を因襲する能はざるものなり

第二 一國の法律は必ずしも成文律のみに限るにあらず人民及び國家の中には既に法律の明文となりしもの外に所謂慣習法ある不文律ありて存し成文律は其實只慣習法の一部を言明したるものに過ぎず是を以て法文は十分に人民及び國家の意志を發表する能はざる事あり

斯の如き場合に於て天然に國家の中に成存する法律をも之を認定し其善良なる部分は之を保存し成文律不文律併び行はれしめ乙をして甲の不足なる所を補正せしむるは即ち政治の任ずべき責にして單に成文律のみに拘束せられ毫も天然に成存する法律を顧みざるが如きは政治の本義に非ず故に又法律と慣習と相矛盾する場合ある時は須く政治思想を以て之を調和するの策を講せざるべからず

第三 如何なる考練ある制法家と雖も全く疑義の生ぜざる律案を作るは極めて難きものなり且つ又時代の變遷人事の改革に由り初めは明瞭なりし法文も之を實際の事物に適用するに當りて疑義を生ずる事あり故に法律一たび明文となりて制定發布せられ一定の形体を有するに至りては其形と得たるが爲め却て往々其形体と精神と相符合せざる事あり

是に於てか又政治の一大責務を生ず夫れ法律の文章用語は立法者の意志の符號なるを以て一般には其文章字義に基き立法者の意志を推定するを以て必要とす然れども若し立法者の未熟不注意等より其意志を達する事能はず却て他の意義を生ずべき法案を作りたる時若くは法律の用語狭きに失して立法者此謂はむと欲する所を含有するに足らざる時或は之に反し法律の用語廣きに過ぐる時或は法律の文面に欠脱ある時凡そ此等れ場合に於ては宜しく其文面上に意義を變更伸縮補正して以て立法者の眞意に適合せしむるを要す單に法の形体たる文字のみに拘泥して事を行ふ時は遂に不慮の結果を生ずる事あるべし故に斯れ如き場合に於ては須く政治思想を以て法律の文面と其精神との調和を計り若し文面に疑義あるに際しては場合に由り多少法律の文面に背反する事あるも法は形体に拘泥するよりは寧ろ其の精神に隨て進退するを政治の本義とする第四 凡そ法律は國家の爲めに制定せられ國家の爲めに存するものなり故に國家たる觀念に反する法律并に障害を與ふる法律は所謂自家撞着にして國家は眞意に戻り國家の目的に反するものあり

斯の如き國家の思想に反する法律も均く眞正の國家の意志として之を尊重する事の不可なるは論を俟たず故に斯の如き法律の存する事あつば極めて其適用を制限し若くは悉く之を撲滅すべきは是れ亦政治の任すべき所あり

右掲げ來れる四箇の場合専ら Binnschii 氏の所説に基きたるものあり

第五 新しき法律の發布せらるゝに當りて明に舊法の廢止を言告する者と又明に言告せざるも暗に舊法を廢止したりと見做すとの場合あり此第二の場合或は時として立法者の不注意に起り或は又時として政略上人民の感覺を激動せずして法律を變更を行ふが爲め殊更に斯の如き方法

を採用する事あり若し此等の場合に於て古き法律と新しき法律と相牴觸する事ある時は之が適當なる調和の方法を計り或は又其改正増補を行ひて新法の施行を計らざるべからず是れ亦政治の責務なり

第六 近世代議政體の發達により立法權の一部を議會に委任してより議會に於て議決せられたる法律は動もすれば偏頗不公平等の弊を生ずる事あり

抑も近世立憲制を採用したる國に於ては其立法部の大体は國會より成り立ち其の法律は國會の議決若くは協賛より成立するに至れり然るに國會は撰擧法を以て之を組織し其法律を議するに當りては議場の多數決を以て之を定むるが故に此多數制度を離れざるの性質は往々不公平偏頗に傾く法律を生じ爲めに國家の公平不偏ある真正の目的に矛盾する事あり

若し斯の如き法律を生ずる事ある時は政治は之をして務めて公平不偏ある事を得せしめ以て國家真正の目的に適はしむるの責に任せざるべからず蓋し中正と失ふ所の法律は國家たる思想に反する者なればかり

以上述べ來れる如く若し法律にして或は既に陳腐に傾き或は民間の慣習と矛盾し若くは從前の法律と衝突し或は法の精神と形体との間に齟齬を生ず或は國家の本義に反して自家撞着を生じ或は一方に偏重して不公平を生せる等の場合には之が修正を計るの能を存せざるべからず而て仮令多少法律の明文に違背せざれば其修正を遂ぐる事能はざる場合と雖も若し法律の變更既に國家の目的に照して之を爲さざるを得ざるの時機に臨まば政治は宜しく之が修正の策を求むるの責に任じ

決して之を等閑に付すべからず蓋し政治の民生を保護すべき義務は國法の形骸を固守する義務よりも重且大あれり故に斯の如き場合に於て強て學理のみに拘泥せず又能く實際上事物の變化に鑑み時勢の進流に隨ひ人事の更易を察し外界の事情に適應して法律の改正變更をなすべきは實に國家の目的を許す所なり

戰 争 論

吉 田 堅 治

曠世の英雄拿破翁が一たびクーデターの兵法を以て、佛都巴里に亂雲を捲き起してより、さうもに靜穩寧謐を極めし歐洲の天地も、硝煙颯り砲聲轟き、朝にはトラファルガー海戦の下に、佛西同盟艦隊は空しく覆滅せられて、颯々たる海風今も尙ほ腥きを覺ゆ、夕にはウラターローの城埋數萬の兵鋒刃の露と消えて、累々たる白骨點々たる血痕、空しく吊古の客を酸鼻せしむ、百姓は鋤を擲つて遠く奔竄し、老若は相繼で溝壑に轉死し、邑理丘墟、人煙斷絶、實に歐洲全土を擧げて、徒に軍馬馳驅れ巷、虎攫龍拏の場とあすに過ぎざりき、然りと雖、天命固と數あり、盛衰榮枯の勢は人力の奈何ともす可きにわらず、連邦の大兵流星奔電の如く、一旦佛境を壓するに及んでや、時局忽如として一轉し、榮枯忽ち其地を代へたり、憐れむべし、昨日は金冕玉冠の王者、今日は輿輓の囚とかりて、萬里セントヒレナの蠻烟障雨に豪骨永へに朽ちぬ、是に於てや、金幣土壤の條約は、彼此帝王の間に締約せられて、闇雲妖霧漸く晴れ、耀々たる白光再び歐洲の天に輝くに到れり。

此れは是れ、十八世紀より十九世紀の源頭に於ける、歴史の舞臺に於て演せられたる、破天荒の活劇なりき、十九世紀後半の歴史に到りては如何、假令普佛戦争露土戦争の如き、紛亂無きにあらざりしと雖、要するに是れ白日の片雲、暫く光明を蔽翳するに過ぎず、概言すれば、十九世紀の歴史は、平和あり、高尚あり、實直あり、鐵道にあり、蒸氣船にあり、電信電話にあり、印刷術にあり、あらゆる文明の利器は、恰も春草の膏雨に逢ふて茁出するが如く、日を追ふて發明し、月を追ふて進歩し、今や整頓具備を毫の遺憾なきに到れり、交通是を以て瀕繁に、商業是を以て勃興し、文物燦然として、泰平雍和の氣象到る所磅礴すると看る、何ぞ夫れ一世紀前歐洲も、一世紀後の歐洲も、其趣を異にするの甚しきや。

此時に當りて、一種の新思想は、驀然として大陸人士の腦頭を衝動しき、殊に彼の形以上の學を研鑽する人、假令は文學者、哲學者、宗教學者等の如きにありては、最も明晰透徹の觀念を以て此思想の畫かれしを見る也、然らば則ち、謂ふ所の新思想とは何ぞや、曰く、戦争あるものは蠻俗の遺風、無用の長物、社會の進歩に幾何の貢獻する所を看ず、といふ即ちこれなり、詩人は椽大の筆を振ふて感情的に之を歌ひ、哲學者は深甚微妙の理を以て之を闡き、宗教學者は上帝の慮に背戻することを説きて一意之を排斥し、政治學者は精細緻密、一目了然たる統計を編んで、その利害のある所を瞥見せしむ、夫れ戦争を以て天道に戻るとし、彝倫を亂るとかし、人生界より、之を永遠に逐斥せんとするの論は、遠く希臘の學問が僅に曙光を放たんとする時代にありて、哲人は既に業に唱道せし所、決して近世に創説に非ざるなり、然りと雖、其論調の急切なる今世

紀の如きに到りては、單に之を尋常一様の反動として觀過す可きに非ず、思ふに寔に其據る所の存してからむ、請ふ吾等をして、試に先づ一二大家の言行を臚列し、然る後徐るに此思想の如何なるものかを研覈せしめよ。

魯西亞帝國の政治專制の極に達し、峻嚴なる法令の下に縦に言論の自由と束縛し、民權を蹂躪し、收斂興發、依て以て天下の民衆を擧げて、クザアの膝下に盲從せしめんとするや、寛裕温良の資性、永く此苛刻も坐視するに忍びず、蹴然貴族の爵秩を擲つて、黒海の一角ヤスナヤポリヤナの邊雲に蟄居したる、文豪レ、トルストイは、人も知る過激なる基督教信者にして、其雄才奇筆は、冷ねく歐人の賞歎して止まざる所あり、彼や戦争を畏怖すること猛虎よりも甚しく、或は著述に、或は辨論に、其主張を吐露して、十年嘗て一日も休まず、案ずるに、彼は熱烈なる宗教信者、従つて其主論の基據する所も、又宗教にあるに似たり、彼れは先づ、聖典に散見する、「殺す勿れ」、「隣を哀め」、「敵を愛せ」、等の章句を左券として、其論歩を進めて曰く、如此は、吾が萬能の主が、人類を眷佑せらるゝの餘りに下し賜へし眞諦にあらずや、苟くも、聖教の眞源を逆りて以て、神れ光明に浴せんと欲する者は、春々服膺、華々孜々、一刻も違はざらんことを企圖すべき也、豈殊更に、大道を棄て、邪惡に趨せ、自ら好んで禽獸に入る如きありて可ならんや、獨り怪む、彼の自ら基督教信者と唱する者にして、公然軍隊に入り、兇器を手にして、貴重の人命を奪つて、更に羞耻の色かきは何ぞや、惟ふに戰なるものは、原人の陋風、人道に戻り、正義に背く、之より甚しきはあらず、戰は白晝公然他家に闖入し、其貨財を掠抄し、其良民を毀傷し、

更に刑法に觸着せざるのみならず、却て凱旋の榮華を荷ふもの也、戦は怨敵を屠りて、其屍に鞭ち、以て自ら快しとぞるもの也、其殘忍酷薄ある、之を久ふて遂に父子相喰み、兄弟相搏つの酸劇、未だ必しもよれあきを保せざる也、詮言すれば戦争は殺人犯なり、免許の殺人犯なり、而かも恩賞を受ぐるの殺人犯あり、法律を蹂躪し、道徳を併呑するの罪惡あり、凱旋門を以て、斷頭臺に代ふるの殺人盜賊なり、嗚呼、神聖なる基督敎信者にして、猶ほ且つ此冷刻を行はんとするや、所謂之れ、鱗鳳の皮を被りて、虎狼の行を爲す者、暴戾惡逆、皇天皇土の容れざる所也、想ふて此に至れば余輩は轉た、人間の價値如何を疑はずんはあらず、客あり告げて曰く、戦れ非あるは、固より自明の理に屬す、而かも今日各國の狀勢は如何、年々歳々浩壤の軍資を投じて、或は軍艦を製成し、或は銃砲を鑄成し、城塞國境に連り、軍道國內に洽ねく、夙夜懐々として、猶ほ且つ萬一を畏れて、嘗て枕を高くし鼾睡する克はず、人を攻め人を殺さんとて、自ら既に神疲れ心勞し、頽然として遂に倒る者、之れ寧ろ笑ふ可きに肖たりと雖、其實然らざるものあり、今夫れ渾圓球上、大小の國布履星羅して相睥睨す、虎狼の志を懷いて餐らざるもの、何時俄に吾に襲來するか、咫尺の間、固より測り知る可らず、若し此時に當りて、吾に帶甲の不時に備ふるなく、艤艦の國を護るなくんば、社稷一朝にして轉覆し、生靈忽ち異域の羈絆に呻吟すべし、之れ豈憂ふ可らずやと、吁、客の言は大謬あり、方今宇内文明の潮流を、東流の水の如く、滔々として進み、嘗て一刻も止まるふとなし、人間の理想は益々高きに達し、道徳は愈々其面目を改め、大道の發揮する所、迷霧晴れ、疑雲散り、戦争の如きは、誠に愚人れ骨頂、意味なき一

の不徳に過ぎざるを目覺するに至らん事期して待つべきのみ、豈再び搏噬狼吞の慘劇を白日に演ずるが如き事ありむや、若し一國にして率先其非を改峻せん乎、徳れ流行する、置郵して命を傳ふるよりも速あり、事茲に至れば、各國の銃器は、鑄られて東西に布設せる鐵路の材とあり、鋼艦は装甲を解て、旅客貨物を搭載して南北に駛走せん、顧みて兵制軍備の無用を感ずる事、恰も往年須叟も欠く可らずと目せられし、奴隸制度が、其廢止の曉に於て、何等の不自由をも感ぜざりしと同一徹ある可きなり、兎にも角にも、天明に則り聖法に遵ふは、人間最高の義務にして、而かも人世幸福の胚胎する所なり、余輩は堅く信ず、聽てば、四海の兵戈跡を絶ち、人類は皆同胞、萬人悉く平等、政府は解散され、法庭は閉ぢられ、渾ての弊竇障疑は霧散して、平和自由労働共愛の社會は、之に代つて現出するに至らん、これ社會のグレートインクワネーションよりして、正に然るべきの理勢毫も怪しむに足らざる也、看よ、歐洲各國に於て、國民軍を應募するに當り、其編入を拒むもの、年を追ふて加ふる、以て其徵證とすべからずや、現に一千八百九十六年、和蘭の青年ワンデル、ウエルあるもの、一書を長官に呈して、軍將の號令の下に、無辜の民を殺戮して効榮とするは、到底彼れの良心に忍びざる所以を述べて、斷然兵役を拒み、甘んじて刑餘れ人と爲れり、余輩は年々歳々、ワンデル、ウエルの博愛を景慕するも輩出して、世界混一の期を促成するものあるを信ずる也。以上はレ、トルストイが議論の要点也、彼は之に止まらず一步を進んで、かの山上の垂訓を五戒に剖別し、其第五條に於て、萬民は上帝れ寵兒なり、國民の區劃、人種の争闘を棄て、隣人を愛し、徳を衆に施し、彼此軒輊すべからざるを述べるに

き、吾人よりして之れ見れば、彼が論旨余りに理想的に馳せて、稍迂遠の嫌なきに非ずと雖、其至誠熱涙は灑ぐ所に至りては、亦以てミルトンが所謂、鳥の戦争黨の戦争に汲々たる、權謀政治家を驚殺するに足るものあり。

非戦論者として、之を文學界に求めて、吾人はレ、トルストイを獲たり、政治界にては、吾人は之を英國史上今も尙ほ、赫灼たる光彩を放ちつゝある、コブテン、及プライドの二氏を獲たり、二氏はこれ「民政の胎内より生き出でたる雙生子」と歌はれたる、英國のグラツカス兄弟あり、其非凡の政治的機才は、能く世界萬丈の狂瀾を廻へし、其雄辨精彩は、英國々會場裏、萬人の耳目を聳動せしめし彼等二人は、果して奈何の氣節を非戦論の上に吐きしか、彼等は固より政治家あり、議論家にあらず、手の人なり、頭の人にあらず、去れば玄を釣り、幽を探ぐる精細なる論説は、固より彼等の口より聞く克はずと雖、一たび二氏の生涯を案じて、其政治的行動に及ぶものは、如何ばうり二氏が平和を重んじ、戦争を排せしかを知るべき也、暫らくコブテン氏に就きて言はんか。

夫れ何れの國何れの世と問はず舊法に拘泥し新法に畏怖するは人情の免る能はざる所にして、彼の烟眼の士、眇たる孤軀を起して當代の風雲に背馳し、一舉革命の業を成さんとす、而かも右に窘蹙し左に踟躕し、遂に雀角の紛々に葬らるゝ所以のもの、畢竟は之が爲也、リチャルド、コブテク氏の如きは、其大に成効したるもの乎、當時英國は、バルネル、ストーン卿、其過激なる侵略主義を以て臺閣に立ち、西班牙に事を醸し、佛國に怨を結び、或は瑞西に、或は伊太利に、好

んで英國を擧げて、紛淆擾亂の渦中に投じ去んとす、プライド氏平和主義を懷て此時に立てり、彼や一千八百三十八年、マンチエスタの旅館に、所謂非戦法同盟協會なるものを組織して、自由貿易の緒業を開きてより、遂に鳩を飲んで壽を求むとも言ふべき政治的生活の苦艱を脱して、ラヂグトンの精舎、鏡聲徹々天花を散らす處、靜に永眠に就きしまで、其事業や多く、其經歷や長し、而うも何れの平和主義の發表に非ざるべき、蓋し彼や、クエーカー宗教の如く、徒に聖經に盲従し、自己胸中に空樓を描きて樂しむ者に非ず、深く古來の英國が、混々の本を忘れて、滔々の末を希ひ、名を義俠に藉りて、海賊的の侵掠を行ふに慨する處ありて也、此故に、露墮戦争爆發して、露れ財源を英に求むるや、彼れ絶對的に反對の地位に立てり、當時の言に曰く、「若し夫れ戦争にして、正義のもれたらんや、吾れと雖、孤劍を振ふて、單伍に加はり、老屍を蟲沙に委して止まんのみ、而かも今日の戦争なるものは如何、彼等は國際の輯睦を思はず、萬國の公法を無視し、苟くも毫髮の快かざるものあれば、即ち張膽張目、鮮血に訴へて事を争はん」と、之をしも正義と言ふべきの、殊に彼の他邦人民か、恣に其外債に應じて巨萬の財源を開くは、即ち是れ、限あるは禍根を驅りて、無限の圈套中に入らしむるもれ、雷に莫大の資本を危殆にせしむるのみならず、平和を破り、悪事を煽搖するの罪、決して尠少に非ざるなり」と彼に此に至りて所謂理歸一説を唱道せり、余輩は今其委細を述ぶるの暇なきを悲しむものあり。

其他幾多の思想家、エンマニユエル、カントの如き、ウヰクトル、ユーゴの如き、或は哲學界にて、或は文學界にて、各々正々堂々の論陣を張り、非戦論旗幟を鮮明にし、今や一代の風潮靡

然として之に傾かんとぞ、嗚呼亦盛なりと言ふべし、然らば則ち戦争何が故に非あるや、之れ吾人が次に逢着すべき題目なり。(未完)

He who is unmoved by tears has no heart.
Napoleon,

史傳

菅公之片影

(承前)

袋

川

皇命は鼎よりも重し、公今は從容として謫處に遷らんとす、護送の車は門に整ひ守衛の從者は心なくも公を促しぬ、時は惟青春の初の方、輕風剪々として堅氷を解き閑庭の草木色未だ淺し、人は屠蘇に酔て未だ醒めざるに公は早くも遠流の僻境に降る、況や姦佞の徒日に其勢を張りて萬乘の尊榮を味ますまど甚しきをや、公慨然又潸然沈鬱多時、漸く出でんとして首を回らせば、其最愛の古梅やうゝ咲きかんとして怨むが如く悲むが如く怒るが如し、公の心はたいりなりけん、東風吹のばにはひかこせよ梅の花あるトなしとて春をわすれぞ、梅の花ぬじをわすれぬものぢやば吹らん風にぞことづてもせん、の二首を名殘にて決然故家を辭しぬ、公に子多し皆處を異にして配流せられもたゞ其幼兒のみ

公に仲ふを許されき。

嗚呼父子一時五處に別れ母君ひとり舊邸暗涙にむせぶ、何ぞ其慘たる、昨は金殿瑤樓の上に鳳音の嘉賞を辱ふし今は樵夫漁翁の茅屋を羨むに至る、朝に吳江を渡り夕に楚嶺を越へ備に辛酸を嘗む、志を勵まして自ら驅すると雖奈何にせん故家の廢景歴然として眼中に映じ來るを、公行く／＼一首を詠みて其夫人に贈る

君がすむ宿の木末をつく／＼とくる／＼までもかへり見しはや

是至悲至哀の文字に非ずや、嗚呼「故園東望路漫漫、双袖龍鐘淚不乾」とは實に公の今をいふなり、夜は路傍の荒屋に夢を食て成らず明けては線練の辱を忍で遷り、行く／＼愁然として歌數首あり

あまつほしみちもやごりもありながら空にうきてもたもほゆるかあ、あめのしたのある、人のなればやきてしぬれさぬひるよしもなき、

あくて公は山崎といふ所につきぬ、嵯峨たる愛宕の山頭復た見る可らず蕩漾たる桂の江流再び渡り難し、願れば白雲縹緲として卿天を鎖し、行路を望めば妖霧濛々として天地に滿つ、況や無心の幼童は公が身邊にまつはりて啼々訴ふる所あるをや、嗚呼超々たる前途また何を樂まん、乃ち永く希望を塵世に絶ち悠然此地に剃髪す、河内國某村に公の姨君ありて尼となれり、途に之を訪て永訣の辭を告げんとす、千言萬句夜を徹して名殘未だ盡きざるに、天無情、東天漸く紅なるとし村家の鶏鳴早くも幽囚の落人を促しければ、涙千行のうちち

あけばこそ別をいそげ鳥れねさこえぬ里れあかつきもかな

を残して去る。

江路東連千里潮、青雲北望紫微遙、公は無限の感慨をもたふして遂に播磨國に達しぬ、播磨の地たる夙に天然に勝景に富めり、須磨は閑寂に幽境にして奇松散點龍騰虎踞の妙象を呈し、明石の波は静にして翠霞靉靄の間徹に淡路の孤影を望むべし、嗚呼公や今此絶景に對す、常かば其燃ゆるが如く湧くが如きの詩想は忽ち發して絢爛の吟詠とありしなふんも、轉變の世難は公をして永く山水に悠遊するに閑日を得ざらぬや、明石の一驛長大に公の冤災をかなしみ、流涕して百方之を慰めんとす、公則ち洒然として曰く驛長無驚時變改、一榮一落是春秋、と春夢一度さめて梵鐘の聲耳を衝て來る、富貴榮名はもとより公の欲する所にあらずと雖綺羅意のまゝに、錦繡心に從て到り、鳳闕雲深き處ひとり君寵を辱ふせしも夢、花匂ふ朝月清き夕仙洞一賦の詩に戲感を蒙りしも夢、思ふて茲に至る、公豈感ならんや、感已に限り無し、胸迫りて一語を吐く能はず、黙々として此地より船に移る、其歌「あるれ木とたつ白波とやくしほとつれのくまわつみの底」はたもふに此時の作にやあらん。

かくて公は潮汲む海女や藻草取る海人の涙を後にして出づ、風静なれば沖に眠れる白鷗を羨み、波荒ければ扁舟は覆ふんことを恐れ、飄々として萬頃の海洋を凌で筑紫に謫所に着きしは其春の末の方からんや、其時日は書の記せるもれなければ之を知るによりあし、是より其死に至るまで殆ど二年、其間氣失し心衰へ遂に病を得て白骨と化す、其間頗る酸鼻に堪へざるもれあるべしと雖今之を詳にするを得ず、唯其詩歌の僅に傳れる者によりて其一端を探知せんのみ。

飛鳥川淵の瀬如何に常なく定なき世なりとも、國家不測の患を顧みずして自ら死するが如きは眞に國を愛するもの、あすに忍びざる所、公は筑紫の天涯に孤客となりて快鬱極りかして雖猶一片報君憂國の衷情禁ず可らざるものありては屢々切齒扼腕せりき、然れども奈何せん海雲萬里音信通せず帝京の眞況を知ることすら能はざりき、是を以て固く其謫居の門を閉ぢて出でず悠々自適閑雲野鶴を友とするの外また他を顧みざりしが如し、其詩

一從謫落在柴荆。萬死兢兢踟躕情。都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。

中懷好逐孤雲去。外物相逢滿月迎。此地雖身無檢繫。何爲寸步出門行。

は普く人の傳稱して白氏の上に置くもの、以て其狀を察すへし、嗚呼門庭草蔓々として人跡絶へたり、語には客なく胸中憂悶に滿つ、徒然遂に堪えずして窓を排せば街衢の碧瓦微に見え、遐邇の梵鐘さあがら人を誘ふが如く、而も公更に出るを欲せず、一僧あり一日公に贈るに一枝の竹杖を以て、公之に題して曰く

音思靈壽助衰羸。豈料樵翁古木枝。節目合將空送老。刀痕削着半留皮。

扶持無處遊花月。拋棄有時倚竹籬。萬一開眉何事在。暫爲馬被小兒騎。

門を閉ぢて俗塵とはなる、竹杖何れ用のあらん、須く廢庵に兒女を慰めんのみと、公の意何ぞあはれむべきや、唯彼乳臭の蒙童慈母にはなれ兄姉に背て配所に父に従ふ幼心に、も都の昔をしのびて屢々東歸せんことを強ふ、公會て都に在りて一日市中を散策す、一貧兒あり裸身蓬髮見るに堪へず又一少女あり徒跣琴を彈りて途人の哀を乞ふ、之を尋めれば其父共に公卿なりといふ、公

は此時に於て己に人生の悲哀を觀ぜり、而も身自ら其轍を踏まんとは公豈之を豫想せんや、配流の窮境にありてすゝるに之を想起し、之を説き其兒を諭して曰く衆姉は獨り家に留り諸兄は各遠流處を異にす而も汝等は慈親に膝下にありて寢食を共にし、燭燈を以て暗を照らすべく、綿絮の以て寒を防ぐべきあり、また何をか悲めると、酸鼻に堪へざるの言千載の下人をして暗涙にむせばしむ、嗚呼聖明の恩海の如かふんとすれば鯨鯢縱橫風を捲き波を衝き満口毒氣を吐て來り、忠なるもの賢なるもの廉なる者悉く其腹中に葬られ去る、古今の通弊嘆すべきのな、公一日今昔の感に堪へずして悵然蒼天を仰げば、折しも彌生の頃遅日悠悠思はやるによしかく、東風吹く庭は悉く荒れて郷里の梅をおもふこと頻なり、ひとり妄想に苦んで日れ暮るゝを知らず、時に群鳥友を呼て歸るに驚きて

夕されば野にも山にもたつげふりなげきよりこそもえまさりけれ

或は輕風囚衣をのすめて日影長閑なるに、聞くとはあしに耳を敬つれば

谷にけみ春のひかりのをそければ雪につゝめる鶯の聲

の細りたるに滿腔の同情を寄せ、或は雪中凌難の梅に鶯の睦まきを見ては、公が色をも香をも知る人のあきを嘆じ

降る雪に色まとはせる梅の花うぐひすれみやわきて忍はん

或は東岡西阜の柳條綠濃かある中一本の老木の春にまれたるを

みちのへのくち木の柳春くれればあはれむらしとりのばれにける

うくて公は鬱々として浮世の暗光を送ること半歳、春過ぎ夏去り遂に寂寥たる秋とはなりぬ、乃ち折にふれて詠すらく

草葉には玉と見えつゝわび人の袖の涙の秋の白露

又夜色蕭々として天水の如く蟋蟀唧々として夢冷に、風は窓を侵して時に孤燈を掠め兒は文を擁して袞衣薄さを訴ふ、正に是親子頭を鳩めて感懷に泣くの時、雲外忽ち賓鴻を聞く、此無情なる自然は公をして

我爲遷客汝來賓、共是蕭々旅漂身、歌枕思量販去日、我知何歲汝明春、

を叫ばしめき、嗚呼雁と公と共に天涯に客たりと雖彼は秋渡りて春歸り是は春遷りて終に歸らず、此詩を讀む者誰か涙かふらんや、公は西府に遷りてより夙に佛道に歸依し一切の塵念を洗滌して超然真如の月に嘯くを樂みしと雖、而も情あり熱あるもの、隨時隨事帝都の空を忍ばざらんや況んや霜は楓林を染めて紅燃はんとし黃白の菊漸く芳しくらんとする重陽の節に逢ふて

一朝逢九日、合眼獨愁臥。菊酒爲誰調。長齋終不破。

の感懷を吐く、嗚呼是世事不堪逢九九、休言今日は重陽」と同く悲調の悲あるものに非ずや、而も其最も人口に膾炙せる

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣尙在此。日々捧持拜餘香。

は其翌十日の作なり、公の心事を察して此に至れば吾人も亦斷腸の思あり、蓋し此年の九月はいゝみばかり公を悲ましめて月なりけん、其十五日、月は皓々として中空に澄み渡り風は漸澁として

白髪を吹きむさへあるに、夜寒の虫の鳴きよわりたるを聞ては感に堪へずして

黃萎顔色白霜頭。況復千餘里外投。昔被榮華簪組縛。今爲賤謫草萊囚。

月光似鏡無照罪。風力如刀不斷愁。隨見隨聞皆慘慄。此秋獨爲我身秋。

と吟ず、時は惟仲秋、所は惟配所、庭には尾花刈萱打亂れ、荆棘の籬は心れまゝに荒れて露しげし、嗚呼入りては玉け臺を研き錦の衣に纏はれ、出で、は肥馬に鞭て人に羨まれしも唯昨日の如くおもはるゝを、實に有爲の轉變の世なるかあ、月は黯澹たる雲に蔽はれてまた出る時あるを、公は何れの日にも郷國に歸るを得ん、宰府に遷客たること一年に垂んとして家狀を知るに由なく、潜然として且悲み且怒り、都に残せし妻子を思てやまざる時、蕭々たる孤雁は涙と共に一封の家書をもたらしぬ、家卿公を思ふの情綿々として紙に溢れ、且奥州藤使君の訃を報じ來る、使君は公が在京の知己にして能く公の無辜を察し之を慰めしもの、今其死を聞て哀悼禁せず、公咄嗟四百言を陳して遙に之を哭す、其一句に曰く、君閉泉壤入、我劇泥沙委、とおもふに公も亦早く紛々れ娑婆場裡を脱却せんと欲せしが如し、公家書を閱讀するふと反復三四、一賦の愁吟に其懷を寄せて曰く

消息寂寥三月餘。便風吹着一封書。西門樹被人移去。北地園 客寄居。

紙裏生薑稱藥種。竹籠昆布記齋儲。不言妻子飢寒苦。爲是還愁愧惱餘。

年は早くも冬となりて雪霏々たり、乃ち

花とちり玉と見えつゝ、あざむけば雪ふるさとゆめに見えける

に在都の佞人を惡むの意を寓し又一夜積雪庭に高く天地慘として眠り難ければ獨り爐を擁いて寒夜を守る、遠近の屋瓦雪に埋れて白點々たるを見て遙に家竹凌宵の英姿を思ふ、都にありては常に之が爲めに雪を掃ひ其清寒碧鮮の高風を友とせしを、不知今夜誰か之がために掃雪の勞を取るものぞと、今昔の感禁せずして忽ち詩あり、其中に曰く、家僕早逃散、凌寒誰掃撤、抱直自低迷、含眞空破裂、長者好漁竿、悔不早裁截、短者宜書簡、妬不先編列、提簡且垂竿、吾生堪似悅、千萬言無効、漣沔亦嗚咽、縱不得扶持、其奈後凋節、と

日は日を送り月は月を迫て青帝また駕を回らしぬ、春色歸り鴻雁歸り而も公は依然歸るを得ざりき、嗟呼年々歳々春新なりと雖春は皆是同一の春、今の春は昨の春に異らず明の春また異なる所なけん、而も世の拵舞欣賀して之を迎ふる所以のものは一に其將來の希望あるによるれみ、唯此希望あり以て己往の追懷を慰すべきあり、若し將來の希望なくんば春陽の來復は徒に悲哀、憤怒、怨恨の源泉たぐんのみ、希望絶え追懷止み難さの公には、軒の雀も庭の梅も今は何のせんとて故人尋寺去。新歲突門來。鬢倍春初雪。處添臘得灰。齊盤青葉菜。

香案百花梅。合掌觀音念。屠蘇不把杯。

又

宣風坊北新裁處。仁壽殿西內宴時。人是同人梅異樹。知花獨笑我多悲。

此他公が謫居の鬱憤をもちしたる詩歌頗る多し、或は一穗の寒燈滅せんとて陰夜史に悲愁を催す時書を抛て「冥々理欲訴冥々」と叫び、或は自ら閻伽を掬で念佛三昧に入り發心北向只南無と悟

るふどあるも而も情激一血動きては其雪冤の意に驅ふれて「佛無來去無前後、唯願拔除我障難」と
ひせぶが如き、見る者聞く者雜然たる森羅萬象は悉く公が悲歌の材料となりき、其歌も亦多きが
中に

うき木といふ心を

なうれ木もみとせありてはあひみてん世のうき木こそかへらざりける

山

あしひきのかなたこなたに道はあれと都へいさといふ人ぞなき

雲

山わうれとびゆく雲の歸り來る影見るときはなほたのまれぬ

霧

さりたちててる日のもとは見えずとも身はまどはれしよるべありやと

日

あまの原ありねさし出る光にはいづれのぬまのさしのよるべさ

野

つくしにもむふさきたふる野へはあれとなき名りな一ふ人ぞきこえぬ

道

あるかやの關守にのみ見えつるは人もゆるさぬ道へありけり

等は皆後世に傳りて敕撰集に入れるもの、其「あるかやの」の歌によりて見なば、當時公を守る人
の如何に嚴なりしやを想ふべし、まして秋氣蕭殺乾坤に満ちて夜色暗澹悲風颯々、遠寺の鐘聲さ
ながら手に取るが如きに於ては

床頭展轉夜更深。背壁微燈夢不成。早雁寒蛩聞一種。唯無童子讀書聲。

又月影娑婆として秋草の露を照らし、虫の聲、風の音のりの住ひの枕に通ひて寒く、ありし昔
れ忘れ難く歸心正に絶へんとして

月ことにあかると思ひします鏡西の空にもとまふざりけり

問秋月

度春度夏只今秋。如鏡如環本是鉤。爲問未曾告終始。被掩浪雲向西流。

代月荅

莫發桂芳半具圓。三千世界一周天。天迴玄鑿雲將霽。唯是西行不左遷。

瞑目沈思言外の意を探り來れば悲痛は辭銷魂の思あり、

風土境遇の慣れ難きを忍びつゝ、謫居すること歳餘、公は遂に其健康を失ふに至りぬ、其詩

病過衰老到。愁趁謫居來。此賊逃無處。觀音念一廻。

は蓋し其最晩年の作あらん、猛々たる疾風已に枯れ盡したる瘦草を吹く何ぞ倒れざらんや、公は
病魔の來襲に逢て逃るゝに處なく、絶代は英魂空しく一杯の冷土と化し終んぬ、實に延喜三年二
月二十五日、年五十九ありき、嗚呼公は所謂黃鐘毀棄せられ瓦釜雷鳴するの濁世に生れて獨り正

義の楯を持し孤劍單騎群佞の重圍も衝かんとし、而も紛々たる魍魎魍魎の阻む所となりて果さず、流離遑遑怨を吞て白玉樓中の人と成る、爾來正義は日に退き姦邪は月に進めり、嗚呼風潮の向ふ所は遂に之を制するに途なき乎、公もし其壽命を完ふするを得て其渾身の血誠を吐露したらんには、藤氏の暴此の如くなきざるべく、帝室の微此の如くなきざるべく、天慶の亂もまた冀くは正史を汚さざらん、人生もとより通塞あり得失あり、余獨り公一人のために悲む者ならんや、且夫公が詩文に至りては金玉の字珠品の句古來已に定評あるありて贅するを要せじ、人或は難じて曰く其詩其歌皆怨怒の意を寓せざるをよしと、而も試に其一篇を取りて深く之を味はし、其怒や私憤に非ず其怨や私怨に非るを見ん、君の爲に怒り國の爲に怨む毫も公の價値を損せざるなり否是公の公たる所以に非ずや、傳へ言ふ其「離家三四月、落淚百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼」は公け口外せしむとあふざるに唐人夙に之を愛誦し、又明の一詩人淇恕は我國僧の東歸を送る時「日本曾聞北野君、愛梅瀟酒又能文、謫居西府三千里、一夜飛香度海雲」の言ありと、時に信憑するに足らざるも、亦古來公の文名内外に膾々たるを知るべきなり。

上下茫々三千年の歴史を有するの國、如何に君子仁人に富むとはいへ、時に騷擾の亂あるを免れんや、唯夫歲寒松柏の節操を持する義士國に盡せありて常に紫宵の上星位靜に蒼海の内浪聲和ぐの瑞象を致すのみ、而も天定らず人亂れて國運轉倒時事日に非なり易し、寛平の興らんとし倒れ建武の成らんとして敗れしが如き世の大變にして又其常態といふべきあり、嗚呼滄浪の水は遂に澄むべきは機なき乎、何ぞ夫然らん、丈夫は須く知己を千載に待つべし、公の孤忠は其當時に容

れられざりしと雖醍醐帝遂に悟る所あり延長元年其本官を復し正一位を贈り玉へり、惜哉時や已に晚し、一條帝も又正一位を贈り玉ひき、且天曆中世人己に祠を北野地に立て、天徳元年右大臣藤原師輔が大に之を築造せしより爾來九百餘年、賽人日に絶へず、明治の昭代に至りて官幣中社に列せらる、公もまた地下鴻恩の優渥に感泣せん、

餘寒料峭として殘んの雪猶深きに獨り其節を持し、百花未だ眠れるの時先づ起て陽春の來復を報ず、江水の邊、深山の奥、常に其奇骨稜々の清姿を失はずして而も朧の月に神韻縹緲たるものは是公が最も愛せし所の梅樹に悲ずや、諺に曰ふ人は其性情に偏して天然の物を愛すと、瀟溪の蓮に於ける、淵明の菊に於ける共に其自然的の關係あるを見ば公の梅に於ける亦其徒爾なきざるを知るべきなり、滔々たる世は悉く支那文明の外觀に眩目して、時に大義名分のある所を忘れんとし、神衰氣微、優柔なる醉生夢死の境に彷徨せる時、獨り毅然として本領を持し、一に精神的開發を重んじて「和魂漢才」の箴言を唱破せ、俊潔高邁蓋し當時にありては梅樹のみ之を知りしあらん、嗚呼「和魂漢才」の四文字、何ぞ余が心胸を刺撃するの甚きや、古といはず今とはいはず、はた將來といはず、開闢以來帝國れ以て帝國たる所以のもれば唯夫國民に和魂あるが爲のみ、寛平を去る己に一千余歲、時勢は駭々として變轉し、昨の是は今非とある、此時に當り宇宙列國の間に驅せてよく其強を保ち其威を振はんとす、宜しく國制を正し文物を進め苟も我短を捨て、他れ長を取るに於ては英才可なり獨才可なり佛才可なり、唯彼精神的習養に至りては和魂に非れば則斷じて不可なり、知らず今日所謂文明の我國人たるもの沈思默考自ら省みて毫も忸怩たるものなきや否や、

嗚呼菅公死して霜消ぬ星移ること幾回、市井の幼童僻村の老翁は到る所月に天満宮の祭祀を怠ぐずと雖、而も一血誠の壯兒の大聲叱呼「和魂」を叫ぶものあるを聞かず、嗚呼寛平の菅公去て遂にまた菅公を見る能はざる乎、もし夫れ春風融々萬緑新なるの頃、舊都の紅塵を去て杖を北野の幽境に曳かんり、梅花繚亂老松を點綴するの奥、碧殿朱欄に髣髴として英靈の招くを覺ゆんかり。(完)

萬物死するは即ち生るゝなり

フ井ヒテ



雜 錄

我國の神話

○總 說

教授 藤 井 乙 男

載籍の事實は紛々たり、思想の變遷は勿々たり、千載の下にありて、千載の上を思議せんと、難しといふべし。我國最古の神祇傳に就て、其徵を求むべきもの、唯古事記書紀舊事紀の三書あるのみ。而も此三書すゞ吾人祖先れ此國に起りてより、數百年の後に成り、口々に語りつぎ、言ひつぎ來りたる口碑と、筆録したるものかれ、是果して吾人祖先が有たりたりし眞實無二の神祇傳かりや、或は後世の思想を以て、傳粉設色せしにあらざるや、外國の神話れ混入しざるや、疑へば實際をかるべし。同一の話説も之を聽く人により、各其心を以て其意を迎ふるからに、話者の事

實と聽者の事實とは、既に幾分が其形を變化せざるを得ず、況や數百年の後にありて、玄妙不可思議ある神話を傳へ書するに方り、其正鵠を得んとは期し難き業あるをや。されば前三書の如きも、各其説を異にし、重要な神々れ名稱すゞ、相一致せざる所あり。加之文章字句の間、自ら明瞭を欠くより、後世の解釋者をして、種々の臆測を逞しうせしめ、其極分れて二派となれり、一を古典派(神道派)の解釋と、他を歴史派の解釋とす、古典派は記紀二書を經典とし、一切れ事實を悉く有りのまゝに尊信し、歴史派は太古の神話を、人事れ繩墨を以て律し去らんとするより、其弊の趣く所、一は荒唐不稽を失し、一は牽強附會に陷る。

傳へべき事は知るべき由もなし知らぬ事は知らずをあらむ

さかしげ人の智は限れると神代のしわざいひて測らむ

怪しきをあらずといふは世の中のあやしき知れぬ愚心かも

怪しきはこれの天地うべかしく神代はことに怪しかりけむ

さうしうに神世の御書説きまげて漢の意になすが悲しき

右は古典派れ大將軍本居宣長が玉鉾百首の歌なり、以て翁の意見を推測するに足らむ。神代の事は到底人智の測り得べきにあらず、今の世にすゞ奇怪のと少のふず、況や千早振神代の昔には、さる事ありけむのしとて、強ひて解釋を試みざる点も少うたず。之より下りて、其末流に至りては、識量翁に及ばざるが上に、當時外國の刺戟漸く熾なるに隨ひ、ひたすら尊内卑外の負けし魂に驅られて、其説愈偏狭固陋通ぜざるに至る。彼の霸氣滿腹雄心落落たる平田篤胤の如きは、アダム

イブの傳説は我が諸冊二神を誤り傳へたる者なりと怒號す、是豈甚しからざるや。之に對して、屹然一旗幟を樹つる者を、歴史派の驍將新井白石とす、其著古史通見解に據れば、神は人あり、神代は上代カミヨなり、神怪の記事あるは、我國の文章多く譬喩を用ふるに因れり、其實今日の人事と些の徑庭ありし、奇稻田姫クシナダといふより、之を取り隠すことを、湯津々間櫛にさすといひ、八咫蛇といふ名あるより、八頭八尾と文なして書きたり、瓊々杵尊が龍宮より乗り歸り給へる鱈は、舟を譬へていへるなりなど、盡く人事に引直して、抵頭神怪を容さず。是はた空前の卓見にして、一新面目を歴史界に開きたる者といふべし。

之を要するに、太古の傳説は歴史的事實と宗教的妄想との混合物なり。されば一方に於て、古典派の解釋を許すと共に、一方に於て歴史派の見解を容るべき餘地あり、而るに一概に人事に適合せしめんとし、又一切神異に托せんとするは、共に中道を得たりといふべからず、假令白石が所説の如く、高天原は常陸多訶郡にして、根ノ國は山陰の地方たることに於て疑ふことするも、尙吾人の祖先は實在の神と理想上の神とを同化して、日神は高天原といふ天上を支配し、其弟君はいと醜く劣りたる下國に移りゆきたりとの、想像を有せしなるべし。上古蒙昧の世にあつて、此の如き空漠たる思想を有するは、自然の理にして、自凝島を國中の柱とし、大八洲國を作りたりといひ、伊邪那岐命が左右の眼より、日月の成りいでたりといふは、彼の盤古氏が大荒れ世に出て、其頭四岳となり、其眼日月とあり、又女媧氏が石を煉りて天を補ひ、磐を切りて四極を立てしといふと互に相似たりと雖、吾人はこの故にチャンバレイン氏が論せし如く〔英譯古事記序論〕、

必ずしも悉く外國の神話を輸入したるものと信する能はず、何とあれば人智未開けざる時に當りては、何れの國人も必ず當に此の如き想像を有すべき理あれば也。

茲に一考すべきは、我國神話の性質、概して莊嚴の分子乏しくして、可笑げ分子多きとなり。天照大神が窟戸隱の一段の如き、最莊嚴あるべき舞臺なり、然るに銅女命の滑稽は天安河に神集ひに集ひ給へる八百萬神を咲笑せしめ、面白をかしく窟戸は開かれたんぬ。其他彼といひ、此といひ、大抵罪もなき可憐の神話にして、鬼氣人に迫り、一讀悚然たるが如き、壯烈の光景絶えて之なきは、そも何の故ぞや。浦安の大和島根波穩の風靜かに、深山大澤の人心を威壓するものなく、猛獸毒蛇の身命を危くする者乏しく、恐怖心隨うて起らず、人心輕快和平にして、驚天動地壯劇、消魂駭魄の空想と夢むに由りしや、疑を容れず。

佛教渡來以前に於て、我國民の宗教心は如何に發達せしを略述せむに、所謂神道なる語もなく、只幽冥の神の威徳に依頼して、幸福を祈り災厄を攘はん爲に、食糞を奉て之に事へまつれり。而して其神々は天地鑄造の造化神、風火木金土五元の神、日神月神大八洲國及び萬物を生成せる二柱の神、此等を天つ神といひ、大己貴命國魂神の如く、此國土に生れ、土地に關する神を國つ神といふ、天皇の御祖先は申すまでもなく、一般人民は祖先をも、神として齋きまつれり、是や、がて後世の所謂氏神なる者にて、藤原氏の天兒屋根命忌部氏の太玉命の如き之あり、(後世其土地を主宰する産土神と混同せり)、尙此他に豐宇氣姫神は、衣食住を幸ひ給ふ神として、特に之を崇敬せり。かく天神地祇及祖先を祭ると同時に、一方に於て動物崇拜、自然崇拜のことあり、こは其

威に恐れ其禍を避けむ爲にて、雷樹靈森の神(葉守の神の類)狼(大神)虫蛇等をも崇拜したり。例證は、容易に發見し得べきなり。

いやしげど雷こぞま狐虎龍のたぐひも神のかたはし

世々の祖の御蔭忘るお代々の祖はわが氏の神わが家の神

宣 長

草蟲三聲

龍 眠 庵

○追懷憂憤

虫聲唧々白露溥々北征の鴻雁塞下に哀鳴し新涼早已に丘墟に入り袖を學窓に分ちて各消夏の途に就きしは己に昨日の夢となり親愛なる北辰半千の士は已に山河千里吳雲渭樹を隔て慈愛温のま天倫の樂園を辭し黃塵萬丈人情浮薄ある紙窓の下久しく埋もれし書机の塵埃を掃はんとす然り而して青燈光底先づ念頭に浮び先づ相語るとの必ずや九旬消夏の追懷をくむ。

砂白く水碧にして鯨波奇巖に躍るの處夕陽遠島の間に没し逝々たる海風袂を拂ふの時抛衣投身長日苦悶の炎熱を洗ひ心神爽快味を感じ健康の彌やにすぐれたるを覺えしかむ黒雲空に漲り海泊怒號龍風虎濤相激せしにあひ遼々天邊に懸る孤帆を送りては故人航海の難を想起し其冒險の跡を追懷し壯心萬感胸裡に鬱勃せしならむ或は日月眼下に出没するの高山に攀登し雲霧脚下に奔逃するの峻峰を鞋躋し領頭氣清き處胸を披きて宇宙を呑み蠢々たる俗客を嗤笑し慨嘆し長風萬里

の念を惹起し轉た一飛千里の翼なきを嘆ぜしならむ或は樹蒼く風涼かに溪聲鈴々の處青苔を掃し白石を枕とし周公孔子を思ひ雄心落落たる佳境に夢遊せしかむ或は松籟自然の琴を聽き蟬聲夕陽に亂れしとき靜かに綸を清潭に垂れ徒らに西公の到らざるを恨みしかむ。

要するに諸士の健康は此間に於て確かに養成せられたる諸士の神氣は此間に於て既に伸暢せしなむ然り而して北辰半千の諸士を以て斯健康斯神氣を以て將に稜々たる肥馬に跨り澎湃たる濤聲に面し正に朔風に鞭を揚げんとす故に其學の精ならむこと其行の壯かむこと予の信とて疑はざる所にして誰う其進退俯仰を視て神州青衿の規範とせざるもの不然れども予は恐る斯神氣斯健康は再び其頭を繁雜ある課業中に投ずるも果して永久に保持せらるゝや否や識たず九旬養成したる身神は風前塵埃の如く一朝にして消耗漸尽せざるや否や而して予の然かく憂憤する所以のもの抑故なきに非ざるべきも今茲に筆を秃し紙を溷すの暇を諸士乞ふ予が微衷を恕せよ願くは北辰半千の士よ常に其氣宇を豁大にし腕を摩し神を達し區々たる小事の拘束を排し洋海の澎湃山嶽の巍峨溪谷の沾靜を懷ひ勇猛直進其從ふ所に勤めよ是れ所謂活眼讀活書の要訣ならむ歟。

○詩人の魔力

夫れ詩人は脈々たる熱血と温々たる同情とを以て宇宙を歌ひ人世を詠するものなり而して其熱血同情は其源を胸底心淵千丈の下風とに穩匿蓄積せられたる確固不拔の信仰に發せ故に信仰を缺くの觀察は皮想に陥り信仰なき文士は淺膚の文字を弄するに過ぎざるべし詩人筆を執て紙面に臨むのとき其胸底只だ確固たる信仰の隠るゝあり其命ずる所筆直ちに走り其向ふ所筆能く隨ふ紙面

爲めに鏗鏘の響を傳ふ故に社會は之を罪として牢獄に投じ世人の之を惡むて齒するを肯ぜざるものに向ひ獨り詩人は萬斛の熱淚と狂奔は同情とを注ぎ其美德を認めて之が爲めに慰藉の勞を取るに吝ならざるあり彼世道人心の爲め身を殺して悔ひす能く憤り能く泣き世上瀆々の冷嘲を顧みず自ら狂客を以て耻ぢざる所以のもの復他にあらむやこのゆゑに溪聲潺々の響も詩人の耳には相思の聒と聽之黃木搖落のさまも文士の腸には宋玉の夢と化するあり而して此信泉は常に流れて竭きと變ずべきに變ト止ざるべきに止まり疾走直進恰も天驥の峻阪を下るが如く奔流急退さなぐ一令の下に三軍立所に止まるに似たり忽ちにして凄風暮雨忽ちにして霽天朗月或は斷たんとしてまた藕糸の微に通ずるが如く或は顯れんとしてまた春蛇の野草を奔るが如く變幻自在追ふべくして捕ふべからず捕ふべくして追ふべからざる者あらずやそれ此の如くして深く讀者をして悲哀の情に沈ましめ聽くものをして太だ奮激の涙を濺かしむるを得るなりそれ此の如くして能く自然に靈化し宇宙と冥合し茫々たる天地に詩興を味ひ一身惚兮として三昧の境に入る事を得るあり然り而して天下操藻の士尠しとせず而かも眞に其信仰を鼓吹するもの果して幾干ぞ輕佻浮薄才を恃み識を銜ふ利口才子なるもの焉ぞ能く斯消息を傳ふことを得んや信仰よ信仰よ汝は夫れ何れより來り又何れに歸るものぞ吾れ更々に目を撰むて問ふ時あらず。

見渡せば原頭の秋色いよ／＼深く萬木既に黄色を染め秋風枯葉を拂ふれ夕文壇に寂寞を吟詩客の來訪を待つや甚切あり文詩何ぞ偷安姑息進んで斯信仰を得んとせざる乎。

○秋と厭世詩人

露の朝月の夕野に靡く薄籬にすたく虫の聲何れり哀を催さゞん露霜を踏みて怵惕の心を起し飛雁を見て悽愴の情々惹く亦故なきに非ず然れども滿田の稻梁黃波漲るの時父子相伴ひて月夜に之を刈收するの情景して愁を感ずる乎勉強れ餘暇閑を盗むて知友と松下に葦を狩るの日心中一点れ哀を留めざるに非ずや識らず秋候果して悲乎樂乎吾れ思ふらく宇宙間の萬象之を見之を聽く者の衷心奈何によりて或は哀とあり或は樂とあるなりこの爛熳の花玲瓏の月愁なくして之を見ば以て人目を樂ましむべしと云へども煩憤の心を以て之に對せば却て悲哀を増すの媒とならむ人或は言をふして曰く天涯萬里の孤客焉ぞ秋に於てのみ故郷を思ひ夫を思ひ妻を思ひ獨り斷腸れ愁に沈むやと然り彼等は常に故郷を顧ひ夫を愛し妻を愛し衷心忡々として既に悲哀の境に陥れるがゆへに金風飄然として枯葉を捲き征雁一品草鱸の味を報するに遇ひ轉た彼等平素の憂悶悲哀の一時に勃發したるものにして其哀凋悲鳴は秋候の何奈に歸因するにあらざるあり見ずや彼等は等しく春に於ても其特有の悲觀を歌ひしに非らずやこれ詩人胸中の苦悶を慰藉すべき理想の満足を得ざればなり人若し圓滿の理想あらば何ぞ悲哀にのみ秋を觀ぜんや菩提の菊花は儼然霜に傲りて香を吐き眞如の月は皎々として破窓を照すの夕宜しく沈思冥想靜々に宇宙の眞善美を悟得し光風霽月の境界高尚玲瓏の天地に逍遙することを得べし然れども斯圓滿の理想を包藏せんとするもの能く人世れ悲觀を歌ふものにあらずれば能はずされば確かに厭世詩人は其悲しき方向をのみ偏觀し未だ圓滿の理想を缺くと云へども世上襤褸の文士徒らに世に媚び安を偷み眼中一片の同情毫標の熱淚なきものに比せば其勝れるの甚しき幾干ぞ

殘燈落月錄

一 岑 生

人誰の思想をかかんや、人誰か感情なうらんや、吾輩元より自ら任ずるに人、造物主特別に恩典を蒙りたる人を以てす、毎日毎時思ふ所察する所考ふる所斷する所判する所慷慨する所浩歎する所歎喜する所杞憂する所又至りて多し、其等の事皆吾之より迷想夢斷にして之を書述ぶるも又空論横議にあらざれば暴言狂語に過ぎざるべし、然りと雖も誠に千慮一得の僥倖を期して之を文に草せんとするや轉た切あり、惜しくは性文に適せずして筆端窘束意に従はず、頃日一夜に感慨萬緒縷々として絶えざりしもの又何に訴へてか其真相の消息を傳ふる事を得んや、只だ益々懸視彌々悲憤に堪えざるのみ。

○故郷の秋色今如何

滿空の秋色天は高くして馬は肥えたり、潦水尽きて寒潭清く千山は紅葉綿繡の如し、是の時に當り拂曉白霜を踏んで新鮮の空氣を庭前叢樹の間に求めんとするの、口邊霧を生ずて冷骨に徹す、然れば早朝を寓辭して萬種は菌茸を群山榛莽茅莠の内に狩らんとするの、霜に染みたる鳥栢翠竹青松の間に散在するの美景は悠然吾人をして金鳥の西山に傾くを知らざらしむべし、又其れ夕陽明滅の時を選んで獨節を郊外に曳かんや、柿は折る、計りに枯槁の條枝に群熟し、孤雁一聲地を掠めて其情轉た悽愴に堪えざるべし、又月明皎潔は宵を以て一日に鬱を松林の中に散せんとするの、眞に之れ石動山頭能越れ景にあらざれば夫れ實に楓橋の夜泊たり、

此の景彼は色皆を我をして直に故山を思はしむるに刺激たゞざるはあし、夫れ故郷の秋色は今如何にあるや杜甫自ら愁悶を慰め賦して曰く

一辭故國十經秋。每見秋瓜憶故丘。

嗚呼吾人亦一個天涯萬里は孤客、故園の秋色を見ざる事茲に幾星霜や而して我をして青山を思はしむるもの豈に只秋瓜のみならんや、

○故郷夫れ何の爲めに戀々たるべきや

吾人は夫れ春風浩蕩の裡に於て故郷を思ひ、避暑漫遊の客舎に故郷を慕ひ、今又半庭の黃菊想戀の情に堪えず、朔風六花を捲いて來り疎林寒聲を發するの日は其れ又幾倍の斷腸ぞや、嗚呼彼を見此を睹る毎に常に連想として吾人の腦頭に現出するものは之れ故郷にあつざるの、古人の詩にも曰く「槐柳蕭疎繞郡城、夜添山雨作江聲、秋風南陌無車馬、獨上高樓故國情。」と又吾戰國の武士をして能洲遠征の途次糶糊の中に越山を眺み三更月に數行の過雁を見ては夫れ家郷を吟せしめしにあつざるや、又仲鷹をして彼の名句を咏出せしめたるものは其れ東天遙くに故國の滄海より浮び出でし明月にあつざりしや、

故に吾人は信ず之を現時吾輩の身上に徴するのみならず、之を古今の歴史に付いて觀察するも、其の詩人たると軍人たるとを論ぜず、其の冒險家たると政治家たるとを問はず、故郷は之れ吾人人類の一種神聖にして犯すべからざるの觀念たゞずんばならず、

然れば吾人何れ爲めに斯く故郷に戀々たるの、吾人は其の何の爲めたるを知らざるをかり、吾人は

爛熳たる櫻花何れ爲めに美なるのを知らず、只だ其美あるを感して之を賞す、吾人は慘憺たる秋景何の爲めに幽邃掬すべきものあるを知らざるなり、只だ幽邃掬すべきを感じて之を愛す、然れば吾人故郷何れ爲めに愛すべきを知らざるも、只だ其慕ふべきに感して之を懐ふ、吾人元より理論的に之を分解説し能はざるにあらず、然れども櫻花を植物學的に秋色を天文學的、地文學的に解剖説明す其美麗其幽邃果して解し得るとあらずか、故郷の趣味も亦深遠微妙説明の及ぶ所にあらざるなり、

○英雄果して不朽なる乎

靜思默考是に至りて四隣寂たり、只だ松影窓に映じて艸虫唧々、障子を排れば月は方さに南天に中して遠近け山色迷濛たり、時に一陣の凄風颯然として吹き來れり、机上の燈火將にふき消されんとす、乃ち再び障子を閉ぢて又机に對し、史を繙らんか、明月語るべし、身は將來を講せんか、凄風悟るべし、由て架上の一帙を抽いて讀む事數十頁、記する所皆な史上の活人物所謂英雄豪傑の小傳なり、然れども讀み來り讀み去る一として其れ偉業の宏大絶倫其紀念の不朽あるに驚歎且つ仰慕せざるはなし、嗚呼巧名竹帛に薫く譽を千歳に垂るゝの士とは實に之れ此等の士なり、吾亦不日社會の舞臺に出づ豈に劣る所ある可けんやと自ら期し自ら決し勇奮以て大に爲すあらんと盟ふ、時に長き沈思の疲勞は漸く精神に感して殘燈火亦た衰ふ、悶たる滿天地、更に人影なく唯遙に孤犬の長鳴を聞くのみ、尙ほ夜半を報ずるの鐘聲は一層寂寥を加へ、其一刹那頭を垂れて一思せば、殺氣暗澹神を激して起り、悽愴一番胸を衝いて來る、何ぞや曰く豪傑果して永久あるか英雄果して不朽なるか、我自々問ふ英雄のみならず豪傑のみならず昆虫草木金石より禽獸人類に至るまで

凡ての萬物を總括維持する此地球世界其物は夫れ果して永久なるかと、悽又悽、愴又愴、心寸斷して腸九廻す、身体戰慄して心神亦失す、地球は永遠のものにあらず萬物は永久のものにあらず、英雄豈に獨り不朽なる事を得んや、宗教家及び天文學者さへも地球の破滅は必ず遠遠のものとなせざるなり、噫造物主果して有るか無さの有りとなせば又夫れ何の爲に吾人及萬物を創造せしむ、吾人の崇拜する英雄豪傑も遂に其の冷淡無慈悲れ中に葬られ果して不朽なる能はざるの噫々、余は蕭然絶望と失神とを以て寢に就きぬ、時に夜鐘三更を告げて睡氣轉た催ほす、只だ間隙を通じて片雲の月を繙みて行くを見たるのみ

○我は依然天涯萬里の孤客たり

神は去りて遠く故國の山に遊び、夢は飛んで遙くに故郷の水に戯む、父母は悦んで我を迎ひ、兄弟姉妹も亦喜んで我を見る、今吾故國に歸らざる事十有余年、常に逆境に立ちて事意に従はず、茲に歸去來分を歌ふて郷に歸る、故國の山水昔日に倍して麗はしく、故園の果樹舊日に益して茂る、山河跋涉すべく知友訪ふべし、一朝冷を冒して果樹園に至る、園は吾が幼稚の頃より祖父が常に栽培せし所のもの、今や柿は熟して將に枝をも折らんとなす、腕を伸して摘まんとせば、冷風臂を拂ふて來り、夢醒むれば殘燈影闇くして落月光淡はし、祖父既に死して、父亦なし母あるも又兄弟姉妹なし、而して我依然天涯萬里の孤客たり。

蝙蝠集

或は眩れ如く青山を迎へ、夢のみとく白水を送りて、七寸の草鞋に天下のうた枕を盡くし、
あるは文の林深く分け入りて、來ぬ秋は錦のな、草を根こし、おのか園生にうつし植へ給
ひたる若殿原も坐すと、聞くもれを、とけたりとて此の五尺の身躰、去を何事ぞ、我々の
らはつらうも亦疎とし、晝はひたすられるしこめ、風清き處をゑりての眩枕、ゆめに胡
蝶となりしは莊子、校暇七句のゆへ、蝙蝠と化せる身の逍遙篇、節録して蝙蝠集と
は名つけたり

千木のやに於て

松下花樵人しるを

風は吹くもよかすも月明のきよこそ、夏は涼しかりけれ、おろし籠めて、やもめ鳥に笑はれ月老
にうごまれむもおかからず、いてや船せうえうをふそと思ひ立ちて、友ひとり二人をのりし
て、誘ふ水のまに、河北のうみに船浮けたり、櫓かど翁れ、やよ殿原此邊螢おそ澤おれ狩らせ
玉ひあむや、こて船を岸につけて煙草などくゆふま、よる小波のうね、何を種子とて生けむ、
浮くさの下はえちらざりける水の深くはあぶねと、可笑き様して忍びよるに、あしまの螢のみな
かたはけて、船の上など飛ひ交を、いそぎ扇してかき落さんと思ふに、ふとはつれてひにけるを
友のいろどの君の、螢來よ水かはん、などさめくもいとあはれ也、螢狩り行い友のたどり、
渡りきて、いまやすきはむりにはくりける事の悪さよ、とて怨するを、翁笑みながら水棹さし
て行くを波にまゐすれば、清う吹き渡る風も心有氣なり、人は船中にありて蟬の羽衣すし

く、月は盃中にうかみてみるめかるむつらひもなし、勝地もどより主おしめつる人こそあるしな
れどかや、おかめは己りま、也諸共に、うれしさは先つ袖にあふれぬ涼さを包むに物なしと云
ひそ、船なる産にかもせん、と舷をたいて謡へも、おあたにも折に會たる今様など朗詠して
心やりすれと客に洞簫を吹くものなきを怨なる、よ更け月かたむき風肌にしみ渡が、うれ幼き君
をして母君のふとおろを忍はすいたつさとやなりけむ、むつうしけなる面もちあはれにありぬ分
れのうあしくて、後髪ひうる、心地はすれと、いそぎ家路求きて漕さかへりけり

涼む子の客のあるか小人形

風涼院の若衆のうす化粧

舟人のわり妻のせて納涼うさ

夕涼みとて犀川の大橋のあたり逍遙うにさわめて、うさ若き小女のため、一人すゝろ歩行きするに
會也、友の彼こそ八千代の流を汲める風雅女なためとて、ゆかしのりて私語を、いかとよこれは
此の邊くれかした女にて、啞なるさへあるをあさましや狂なり、と例の友れかこつに、前に床し
うり友れあき足らぬ氣勢にてひそかに溜息しけり、後にはかた女を螢の君とあさなして、往來
するわかうと等のかかひたわむれおとるを、あふぬ事に悪みて人の心れくもりゆくをはかお
むもをかし、いかにあはれと感し劔

啞せみは燈爐の火に狂きおり

要しえて納涼に成りし思かお

蓮の葉にはたるをつゝむ童哉

まあとや富士の根の雪さへ消ゆらん、たうまうりける此程の暑さに、いかに坐しまをらむ、なごいとすゝしう蘆手に書き流したの末に、時のもれなふさはは、御わたりにさゝいつへうも侍ふねど、契りたきし花賣れ童女のもてきにけるなめればとて、消そこにつけて、穂の二三寸ばかりなる尾花送來したり、夕さりはしにうらぐまといひて風待つほど、弟の螢よくとそめくに、人皆はやり水の方をなかめていたるに、爰におそてふをうへり見れば、を瓶のをはかの葉末にこそは、招くを花に浮りれてや來し、あふす友か雅う、

涼臺に人あくて匂ふ手帛うな

若殿のほたるを侍女に賜けり

螢二つ少しちきさきや妻あふし

月まどかなる夜半、いねかての床出て犀川傳すゝろありきぬ、堪難のりし晝のあつさも白ささ、れを行水の流れてや往ぬゆる、涼しさに猿丸の宮近くたさり來にけり、神苑ひろきにあふねど、濃き緑れ葉ころもうつきて立てる、骨逞しき荒木ともの頭ちうく枝を組み、あやめも分りぬに鼻なくなどいとさひたりや、折ららの風にさゝと音して、世ならぬさまの光見えけり、あやしと思ひて、ういさくる根盤をしけみいく度か蛛のいやふり足いと露にぬれて、何草にか白う小さき花咲けは草の蔽へる、水あせし小溝にそひて行くはし、はつかに水たへたるに、木れ間漏る月影やとりて、岸にはみくさ生ひたり、先れ光はあひける草のひまより之を見えたるあめり、

風細う木の下やみを通ひけり

草をいけみ見當ふさりしそれ矢哉

巫女のみめよきか獨り夏やせず

河骨をつふてにちれるはたるかあ

女俱して商人橋にゆふすゝむ

虫干こそをかしまものかれ、あるは残れる小袖に懷舊の涙せきあへず、花にうたひ月にうぞふく故人のおもかけ忍ひいてられ、あるはさゝやうある胸に家庭の樂を思ひ君と干とせを住吉のうらはつのしくさとほわかふみたる、あるは邊土のつまを戀ひ、あるはかれにし若草の妻慕ふなど、人の心のむきく感異なりや、昔者さる仁王が荒法師の、猶幼のりし時今は掌をもえ蔽はぬ衣さにけりと聞きて、かどろきの極み笑ひこうれて、遂に身まのりきとて、興あり。

虫干や歌書より出て一君か文

つまと分れみ度物憂き虫干す

虫干のよき衣にほふかた折戸

白山に詣つとて友とみたり、松任より鶴來に向ひけるの、休らふへき影もかく眺望もなく、徒に照る日に白う糸なす街道の末遠く、動くともなき寸馬豆人、見るのくに物憂く、とある一本松此蔭にぞとれば、猶袖濡すせみ時雨、折のふ通りかゝれる車上の深張傘、誘ふ水まつ浮草めきたるか、われ等を見下して、片頬に笑をたへたるにくくしさに、更々に暑の堪難のあしを、晝

顔狂の友の我等をへたゞりて、さまよひける清水ありといふにうれしくて、はゞり行けば野中の清水清けなり、昔を知らずともいさ結へやと云ふに、かたへに息へる雲をもはさぐねましき旅僧れ、杓參らせむとて清なるをのしたるおさげさよ。

恐るゝ清水に足を浸しけり

繪日傘の束髪なりし怨みかな

炎天を石こもからて荷馬りか

晝顔や洲に合羽はす川すゝみ

清水とくゝ甲に草の亂うか

旅にして何の山頂にあらはれし一叢雲、見るかゞに峰移りし神さへありわたりて、野末の森さては降込られし宮居の、けさやかゝりし赤けの鳥居も、うちつけにはそれのとも見えず、ふりそゝく雨を縦貫にとふや木の葉を織かす風の姿を、逐ひつゝと見れば、思はさりし男の、社檀のかけに妻なふむうつくまれるを蓋ひて、たれれぬれから露しけくしたるゝ古松のうれを、見まけて立てるのありし、愛とまことよ。

夕立を野茶屋に晴とぞ白拍子

ゆふたちや小冠者虐を病む夕

化ありてふ院れ葉柳ゆふ立す

白雨を眺め出たる禰宜りな

持明るんとてむつろしき精舎のめぐり、しけき蓮れ、山の端すこしあがりて西に星れ林のかれんとする際に、はつゝと音して葉のくらきに花のいろけさやうに咲きいて、そこはうとにほへるは、人目かきみ山れ奥のなつ木立、青葉にてり日の光は金色の霞くれに、羽あろもぬきすてゝ天女の、暗にも匂ふ肌をかをらせ、互に清き山の井を結ひかけむすひかけ立てるさまにて、あはれさすきて尊とさを、なむの心を岸の葉やかさを忍び出てゝ、のさし玉れ白露ちらしあとする、風の戯れこそにくけれ。

蓮葉に蠅の戀するはしたあや

蓮咲くとき空に聲ありあゝと云ふ

心中ありし癡院の池れ蓮のあ

蓮よるゝ茎に小さき蛙哉

苦心して蓮に石うつ小僧かか

或夕くれ友かり行に主はなくて母君の、君さまは止てもうなとく歸りまし、とて假初に出でけるおればいきたまへ、と誘はるゝまゝに端居して君待つ程、なかむれば山のはに匂ふ月影に園生の柳のうれのみ明く、木立は猶薄墨に匂ふを、さと吹き渡る涼風に葉末の露のこほるゝ氣勢す、をかしくて欄干によりしに小暗き藤棚の蔭より、さやけき爪琴されと忍音の優る調、聞くうらに心の駒はさまよひ出てゝ、身は欄に膠したらん如く動きもやうて、聞居たるをやかてひさやみたる、われしらす仰くみ空の月高き心つきて見返れば、言なくて笑むは友かあふすか、

枝折すへく徒然くさに短き夜
短よを笛の記になく遊子あり



文 苑

薄紫

(二) 桐 壺

たまくをしき唐錦

知るや知らずや桐壺の

つゝむにあまる情とば

胸に幾多のうき思ひ

ありし百夜に契り來て

残と言の葉あらなくに

つもる限にとけやふぬ

ひたふるつの情こそ

やまふれ床の露しげく

夜うるゝ人のねたみにて

乗るもゝのうき手輿と

つらき別れの種かれや

君のかたみと眺めつゝ

命婦不通ふ露を置く

涙あやあき夕まぐれ

葎の門はありながら

はうなく絶ゆるさかふひと

鎖さぬ軒に月ぞ訝えける

松山乃時雨

美島竹外生

仰ばばたかき聳えつゝ、

劔とけつるそはやまは、

高く祀れる御さきぎれ、

しるしも見えす蔓鳥や、

蓬のびつかうづむまで、

詣つる人のあぢきるか、

御さうの烟たえはで、

手向の水のあども多く、

神さびたてる神杉の、

梢をわたるやまかせも、

すゝろに寒く響くあり。』

※

厭離欣求のまゝより、

年をるまれしるる里は、

ほろれ都ののび出で、

麦 苑

ゆく衛もしらぬ雲水の、

木の下りげを宿となし、

かり寝をむそぶくし枕、

かれぬたび路の霜霧は、

すみぞめ衣いる裾とも、

法華三昧つとめつゝ、

路をいづこと白峯の、

雲に迷へてやうづに、

御はたの前にぬらづきて、

こゝろありげの寒法師。』

※

涙ながるにかさつづく、

『きみが御顔を拜まなど、

簪の小舟にみちとびて、

長き浦曲のたびの空、

あめを合める孤樹の色、

悲や君はあへなくも、

西十堂

神去り賜ふと人づてに、

松吹く風に音和しぬ。』
『松山や浪に流れてこぐ舟の、

たどりしものといつ迄も、

やがて空しくかりにける哉、』

さめねばまこと幻れ、

寒僧ふのくかんじつ、

世はうつせみのる衣、

永き暗路のたまでも、

無常のあらしむさまトク、

御籠をうくる身を嬉し、

あはれ時雨る、九重れ、

『よしや君むかしの玉れ床とても、

雲井の月も今は、や、

の、ぶん後はかに、かはせん。』

光も見えずなりにけり、

御廟を渡る小夜風の、

あ、北闕のはるの花、

法の燈たえくに、

※ 流れて不歸の水に添ふ。』

無明のやみををらしつ、

※ なげく涙にむせびつ、

消えて残れるものとは、

手向くる花に置く露れ、

岸うつ波のまたまあり。』

稱名念佛とあふれが、

(完)

御はかの内に聲ありて、

月歌十首

花 廼 舍 正 義

早秋月 柳ちる初秋ながら涼しさに心引かる、弓張れ月

十五夜 嶺こゆる厂のつはさも數見えて空にさやけき望月の影

山望月 山松の木のみをかり急すていさよひもせよ望月の影

海邊月 旅衣なには菅笠のたむけて見る月かけもすまの夕評

嶺上月 山本の庵に、ふるる瓜琴の引と、めてんみねの月のけ

机上月 影なから巻てもみはや足乳根におくぶん文をてらす望月

月色如雪 立待のおもひもつもる我袖に雪とみるまてすめる月哉

山月入簾 山端の月も入りきつ燈火をそむけてかたるをすの内哉

樵夫歸月 月夜そと心急かて山人は紅葉ののけに長居しにけん

對月待友 まつ人の音つれぬまに夕月は叩かて門に影をさくくる

紅 葉

香 滿 多 反 經

うすくこき色にやわさてそめつぶんしくれも露もかな、木すねを

須磨海濱月

須磨明石名はうはれとも浦つ、き波に打よる月はひとつに

秋 夕

中 村 了

秋夕はしとあもべと物のおもはれてうきに堪はぬは秋の夕くれ

秋 夜

さすきりな心して啼けさよごだに物おもふ秋の夜半の枕に

残 暑

孤 山

秋たてよまたぬきのへぬ夏衣あかぬはしぬに風をまつ哉

秋 の 内

蓬生にあく虫の音をたつぬれば袖につもちるあきの夜は蚤

秋 季 雜 詠

負角方の鬢のもつれや秋の風 無 禪

門生に詩を課す菊の主人かな 文 漪

棹させば兩岸の萩のみだれのな 光 夢

渡場のたそがれぬすゝき風寒し

配所哉蚯蚓鳴く夜を木のまくら

人の妻の鬼灯なすすわのさかか

くつはむし鳴くや月夜の岡れ松

さりくす野分に鳴ぬ一夜哉 愛 花

菊を折る靈れにほひよ明の野路 竹 外

泉水に仕掛花火のみだれけり 蒼 子

豊年の新酒に會す農と商 簞 舟

長き夜の瓢箪を振て見たるかち

深り得てしふるき燈籠を張て盆

花火落ちて水に落ちざる二寸哉

さりくす葉蘭に冷えし露を鳴く

泥の紫を朗評集のしとりな

無 村



與 蔡理事 書

村 上 函 峯

十二月十日。村上珍休。謹再拜言。蔡伯昂閣下。珍休賦性頑鈍。講經之暇。唯好文章。客歲來此。素欲一游貴國。望嵩華之高。觀江河之大。而與學士大夫游。以益養其文氣。而一官羈身。未得遂其願也。一日訪法官西園宜軒。宜軒曰。子不見蔡伯昂乎。珍休曰。伯昂何如。宜軒曰。伯昂學博而行高。又善文章。子盍執贄見之。必有大益于子矣。珍休心竊慕焉。既而與閣下之屬

僚孫諸人相識。益得聞其詳。景慕者甚。蓋閣下。夙登科出身。學術文章。推為大家。加以雅量包容。不以才驕人。真君子也。於是躍然曰。大國果有人矣。因自謂官游身。不得放情山水也。況海外名山大川乎。然幸得名賢君子。受其指導。不啻彼洋洋峨峨之發。揮精神。振作志氣也。蓋閣下實其人也。幸與之游。則亦足以遂其願矣。且此間。除宜軒及二三知友外。無可以文詞與語者。是以不顧干譎之非禮。所以容交於閣下也。珍休居此以來。交氣日覺衰弱。然公務餘。作雜文數首。固庸庸小言耳。今淨書謹奉之閣下。儻賜以大斧。實望外之幸也。珍休與閣下未有一面之識。敢猥布腹心。閣下恕其罪。察其意。何幸加之。村上珍休。恐懼再拜。

栽金桂記

宮本潮來

桂有數種。巖桂者俗呼木犀。金桂則巖桂一種。其花黃故名。蓋植物之英也。歲之四月十九日。實為我第四高等學校創立日。例新蒞任者。栽樹以為紀念。余乃携金桂一株。栽前庭焉。樹高纔五六尺。雖無凌霄之姿。犯霜雪驕沍寒。柯葉不渝。四時蒼蒼。若夫涼颼蕭瑟。燈火可親之候。黃花滿枝。則奇芬仙馥足俾人一洗塵垢其操守高風可仰而不可狎矣。方今天子聖明。奎運隆盛。四方之士來學于斯。常不下六百餘人。想應有高材異能之士在其中。諸士而異日成器達材。與金桂競其英。獲西人所謂月桂冠。以繫一世之瞻望者夫誰乎。明治三十一歲次戊戌教授宮本平九郎識。

菊園雜記序

華陵明石中和

位登三台。塵事執掌。煩襟熱蒸。以不能樂天者。其富貴中繁困窮乎。身居窮廬。花月相賞。胸清神快。以樂天者。其貧賤中之閑富貴乎。三台雖尊。而不可得其安樂。窮廬雖卑。而可以得其安樂。嗟乎人生有限。何困死於猥塵中。而不優游自樂以延其大年也。村山巽々云。好胃頭。河田君某。齡踰七秩。自號菊翁。隱居于閭巷之間。庭前構園籬。而殖菊千種。身衣襤褸。足着敝屨。不問春秋夏冬。日月培育玩賞。以逍遙乎園籬之側。步倦而上廬。迎明月。彈琴。向清風。吹笛。有井進齋云。六朝佳句。感至而吟咏。輿極而臥。而不知富貴貧賤之為何。又不覺己之年齒歷幾寒暑也。豈其真樂天。以忘憂者歟。菊翁頃作菊園雜記。將俟余序以傳之世之同好者。余因其乞之牢不可辭。乃叙曰。自古幽人逸士之愛菊。不為尠也。好事者或以比君子。其說以謂。歲華婉婉。草木衰落。而菊獨殿百卉。德備黃中。燁然香發。傲睨乎雨露風霜。是幽人逸士之操。雖寂寥荒寒。貧窶落莫。而味道之暇。不改其樂者也。吾見落英之可飡。曉芳之可觀。煎焉而可藥。釀焉而可飲。囊焉而可枕。故獻酒而稱其壽者。李適。飲水而愈其疾者。胡廣。蒹英而銷其災者。桓景。朱儒子服花以成其仙。甘谷人飲其津液以延老壽。或愛其香。詠其色。或泛之於酒。或摘而盈把。或啜其汁。咀齏。高論唐虞。詠歌書詩者。乃陶淵明。張景陽。謝希逸。潘安仁。張欽夫也。此數子而愛之以樂天。則菊也於君子之道。洵有臭味哉。巽々云。好與故。今菊翁清貧而不願溫富。唯與菊花相知。而不知老之既至。亦知其可樂。而不知其可憂也。嗚呼若菊翁者。既謝絕微利與名。而安養其性與命者耶。巽々云。好結尾。抑又陶家之衣鉢。其在乎此人也耶。巽々云。筆頭進步。妙。

村上巽々評。此篇以風韻勝者。不圖名利之場中。復見如許翁。真是五柳老仙之流亞。可欽

可敬。

有井進齋評。秀倩有二六朝之氣。

加藤櫻老評。迂紆曲到。姿態橫出。六一居士。不得擅美于前。

木原老谷評。風致高遠。神韻蕭散。讀之使人襟塵襟而生逸思。何等文情。

石井南橋評。非二六朝。非二六一。惟是讀破萬卷。而後自成一家體者。

硯銘並序舊作

石田竹溪

文人而愛文其猶武人而愛武器蘇東坡米南宮皆善書而有所愛猶有于將莫耶鬚切膝圓歎今夏隣翁其穿地而得古瓦乃持貺於余々受而觀之外凸而內凹面有篆文曰唐招提寺自彫以為硯亦可愛也蓋翁能知余之好奇故及於此嗚呼古人之愛者皆有詩有銘余獨不可無也因爲之銘詞曰

外凸如阜 內凹如池 厥質古樸 厥色淺黛 土中所得 不損不虧

彫以為硯 太雅且奇 常與筆墨 永侍書帷

題萬里乘槎圖送小室屈山之歐洲

秋 蕓

休看星斗歎升沉。甄穢豪懷壯古今。麗都花月他年夢。蠻域風雲此日心。儒士入齊辭百鎰。詞臣傲蜀值千金。鐵蓬聲寒柁樓上。夜深驚起老龍吟。

中秋無月

黑子軒

席上同秋蘋岐山兩詩伯賦

欲陪高士試清遊。來上君家觀月樓。詩到宋唐夷亦險。酒評賢聖獻還酬。絳河無影縫雪淡。金桂吹香帶雨幽。相值不孤三五賞。今宵無月也風流。

晚夏舟遊

龍山梅塢

輕舟避暑好遨遊。雨歇雲收南浦頭。篷底吟詩宜載酒。柳陰垂釣有驚鷗。半江綠樹山千疊。十里烟波月一鉤。極夜深宵猶未睡。白蘋風起冷如秋。

秋江晚望

鹿州之北海門東。淡夕長江望不窮。遠浦帆歸秋水碧。上方鐘動夕陽紅。鯉魚乍躍荻蘆外。鷗鳥猶眠烟靄中。尊貴不知真個景。備將圖畫上屏風。

秋日雜詠

征鴻殘燕去來忙。極目蕭條故舊妝。夜露滿庭蛩語急。曉霜荒砌菊花香。風飄疎柳亂搖夢。雨打破蕉愁斷腸。憂國勞心人慷慨。悲歌一曲酒盈觴。萍蓬百里寓他鄉。遠寺疎鐘易惋傷。翠竹階前蕭有影。白蘋江上亂飄香。淒涼月色牽秋思。澎湃濤聲撼夜牀。起座推窓寂寥甚。羈鴻迷雁共茫茫。賓雁聲中秋既央。秋霖蕭瑟夜初長。悲風忽引故御感。落木偏傷孤客腸。立鷺敗荷堪入畫。寒松黃菊共凌霜。蹉跎空抱青雲志。夢入中原逐鹿場。

次故南州翁出關門詩韻

雪

秋

出里門

欲酬天地萬千恩。決意飄然出里門。孤劍排雲之越路。秋風滿袖暗銷魂。

水亭夏日

臨

登

生

槐樹陰濃翠欲流。臨池水閣影如浮。抱書高臥思詩處。一陣清風到枕頭。

秋の野の草も分けぬにわが袖の
このおもふなげに露けがるらむ

賞之



雜報

初見の辭

蘆荻花颯つて白露冷かに、秋雁高く飛むて乾坤寂たり、此際舊編輯員諸氏は、空しく梧葉凋落の嘆を遺して本誌を去り、編輯の重任生等の頭上に落下し來りぬ、生等卑識驚才。釣幽別微れ議論、展錦轉珠の文辭有るにあらず、誤つて部

長の撰に入り、明りに重大れ任を拜せるのみ、心竊に渾身の勇を鼓して職責を曠ふせさむむとを期すと雖ども、獨力焉能く辰章校を代表して他校と文壇に聘馳するを得むや、半千の同學諸氏よ、願くは滿腔の議論と、滿懷の詩囊とを傾注し、本誌をして、其美を燦爛たる紅楓と

競ひ、其光を玲瓏たる嫦娥と争ふの盛運に向はしめられむことを、

送迎新舊教官

離苦の斷腸聚睦の歡喜は、輪廻轉展吾人をして喜憂せしめし事幾何ぞ、振り合せし袖にも多少纏綿の縁由あるものを、況んや一度校庭に在りて師と敬ひ弟と慈まれし者、一朝流星南飛して別離の悲境に遭遇す、情寔に痛恨、吾曹焉んぞ暗涙の雫々たるを禁ざるを得んや。

諸教官れ同學の士を啓發し、蔽を通ト惑を解き、諄々清誨の化を垂れ給はん事、希望に堪えず、終りに臨み諸教官の略歴を右に記さむ。

三竹欽五郎 先生初め職を參謀本部に奉りて譯官たり後第三高等學校に獨逸語教授を囑託せられ更に轉りて山口高等學校に教授とあり今回我校に來り教授とある。

今回花輪教授を始め、雨谷安木田浦井の三教官は、職を辭して我校と去らるゝに至れり。多年薰陶の恩、化育の徳、吾曹同學の士の負ふ所甚鴻矣。袖を分つに際し、惜別の辭に堪へず、唯願ふ、諸教官の益々壯に、愈々健に、自重自愛以て邦家の爲に盡瘁せられん事を。

藤井乙男 先生明治二十七年文科大學國文學科を卒業し文學士とある福岡尋常中學修猷館の教授たりしが今年四月職を辭され遂に來りて我校に教授とある北海道は先生の故里なり。

憂あれバ喜あり、願れば三竹教授以下は新教官は、今や我校に來り教鞭を執るる、吾曹は深く

長屋順耳 先生は岐阜縣の人明治三十年文科大學英文學科を卒業し文學士とある後大學院に入らる花輪教授の後を襲ひ今や我校に英語科教授たり。

なる筑後の傳習館の教師たり後福岡尋常中學
修猷館山口高等學校等に轉ト更に今般我校の
教授とあふる。

堀維孝 先生初め山口尋常中學の教諭たり後石
川尋常中學に轉せられしが更に我校の助教授
とあふる。

末近義助 先生曾て兵庫縣龍野尋常中學の教諭
たり山口の人にて今や我校の助教授たり。

武笠三 先生文科大學撰科を卒業せられ後東京
府師範學校真宗都中學等に居る今や我校
和文科の教務と囑託せらる。

明石孫太郎 先生は我校漢文科の教務を囑託せ
らる會ては第一高等學校に居られ明治二十九
年岡山縣尋常師範學校教諭に轉せらる。

ド、ハヅルランド 先生英國ケムブリッヂ大學
を卒業し我國に來つて神戸乾行義塾の教師た
りしがマッケンシー氏に代つて今や我校英語

科の教師とあふる。

卒業證書授與式

本校第拾回卒業證書授與式は去る七月十一日を
以て講堂に於て舉行せらる、當日午前九時式は
例に由り森嚴なる勅語捧讀を以て始められ北條
校長は各科卒業生に順次卒業證書を授與し了つ
て左の告別辭を演述せられぬ、

告辭

卒業生諸子、本日本校は諸子の爲に此式典を
舉げ貴賓の來臨を請ひ、以て諸子の正に本校
所定の課程を修め卒り、我卒業生に要する品
格を具備することを證明す、實に榮譽と云べ
し、此榮譽を附與するの日は即ち一の責任を
確定して之を諸子に負はしむるの時あることを
記應せざる可らず、古語に云ふ、百里を行く
者は九十里を半にすと、諸子は今より進みて
帝國大學に入らば、榮譽と責任とは愈大に愈

重く、前途尙遠し、且つ國家の泰運に方り、社
會百般の機關は年に新に施設せられ、有用な
人物を望むと頗る急なり、諸子は本日附與せ
られたる資格を愛重し、教育の聖旨に奉對し
益智識を開き徳器を磨き、以て國家の望に副
はんことを期せよ、

卒業生總代半田正身君は左の答辭を朗讀せり、
明治卅年七月十一日、本校生等卒業生の爲に
盛典を舉げ、來賓の面前に於て卒業證書を與
へらる、生等光榮何を以て之に加へん、生等
の今日ある所以は本校教導の篤きに頼る、長
く銘肝して忘れざらん、特に校長閣下の懇篤
なる訓戒を賜はる、感喜曷々極まらん、訓旨
の如く前途尙遠く、成業亦期す可らず、然り
と雖所謂驚馬も十里千里に達すべし、冀くは
自今大學に入て夙夜匪懈智徳を磨礪し、聖恩
の萬一に奉答し、閣下の訓戒に差はざらん

を誓ふ、聊り荒辭を陳トて以て答ふ、

次に中野教頭は學年間に於ける事務の成績を報
告し最後に校長は卒業式の機に際し聊り來賓諸
君に教育機關として本校の地位を概説せんとして
再び壇に登り、高等學校其物れ本意は大學の豫
備的教育を主とするに非ずして高等ある教育を
國民に與ふるにあると、大學豫科は本來高等學
校に對しては余事あるも現今尙醫學部を除くの外
外總て大學の豫備なると、併せて尋常中學と其
關係を略説し、更に本校前任校長諸氏の功績を
賞揚し自己の所懐を述べて壇を降り同十一時半
全く式を終る式後來賓を別室に招つて茶菓の饗
應ありき

當日卒業の諸君を左に録さ

第一部 法科志望生(三十五人)

政治 荒木 篤三郎 法律 笠井 雄吉
同 中村 光吉 政治 上杉 慎吉

法律	深澤新一郎	同	永野八郎	英	福井喜彦	漢文	伊藤伊佐鶴世
政治	森源之助	法律	入谷清長	史	月岡真備	漢文	高橋亨
同	朝倉陽之助	法律	秋田信太郎	哲	山本彦太郎	史	吉田哲雄
同	山口重作	同	田中崎太郎	哲	曾我部俊雄	國	長谷川福平
政治	堀井治一郎	同	成田喜久治	英	名川彦作	漢	北村澤吉
同	早川外吉	法律	林直	英	滋野惠音	哲	山川真純
同	紅林豊治	同	三宅國太郎	哲	八木光貴	史	田村安太郎
同	芥井仙之助	政治	多島與三太	英	池田清二	英	五條隆圓
法律	田鶴濱又三郎	法律	加藤太郎	第二部	工科志望生(廿四人)	×ハ京都大學	
同	二宮真次郎	同	田邊輝雄	船	阿部政二郎	船	高木清吉
政治	林達爾	同	神澤唯治	工	×荒井緑	機	柳田友磨
同	粟本貫一	同	堀川行道	船	柴田秀生	機	年澤象二郎
同	大森保之助	法律	竹内佐太郎	機	×長澤泰知	土	×寺崎新策
法律	吉川三雄司	政治	國分直記	同	伊藤三郎	土	澤田堅太郎
同	大脇菊次郎	法律	松島重隆	同	福田十太郎	同	土井良太郎
政治	山形平作	同		電	渡邊明十郎	同	×栗川安太郎
同		同		船	永松文一	土	×山下齋治

文科志望生(十六人)

同 老田太文 同 ×古澤 健次郎

電 大島辰之助 機 宮崎逸丸

土 加藤苞 土 ×藤尾惟一

株 大石雄輔 機 ×河合兵吾

理科志望生(六人) ×ハ京都大學

化 半田正身 物測 藤 教篤

動植 高橋堅 化 稻並幸吉

動植 山本信夫 化 ×岸 喜鑑

農科志望生(二人)

林 上村勝爾 農 永岡 亮

第三部 醫科志望生(十五人)

山崎三郎 瀨戸孝一郎 大森篤次

石原孝吉 小川得藏 白杵才化

慶松 勝太郎(藥) 國井和雄 丸山忠治

八田 恒 堀 保次 原田永治

丸山 義男 中尾 保太郎 九尾 晋

以上

卒業生諸君を送る

櫻雲霞彩霞に煙る春日には兼六公園に花より
も艶なる香骨を養ひ祝融れ怒いと烈しく釜中の
思に堪へがたき夏の日には屏川の澄める流にか
の心の清とたゞ金風漸瀟として萬木葉空し
き秋日には篇舟を蓮湖に浮べて明日と其赤心の
清蕭を競ひ寒颯怒吼飛雪紛々たる冬日には澎湃
として百尺屏立の斷崖に激して白泡を飛す北溟
の激浪をおれが魏魂の友とあしこゝに三とせの
長き年月北辰校に螢雪の苦學を積まれたる功空
しからず兄等はほまれいと高き卒業てふ月桂冠
をいたゞき胸中幾多のホープと幾多の喜悅とを
おどらして此住みかれし金城城下をあとにし
あるは東都にあるは西都に入り、その各脩めん
とする學れ蘊奥を大學の門にたゝかんとす、余
等ひとり、遠き孤島にとりのこされし俊寛僧都に
はあらねども驚駭千里に堪へぬ身のこれより、

恭敬私淑して啓發誘導するべき先進を失ふかと思へば、實に悲嘆の情に堪へざるものあり、曩者本校世評に上り幾多人士の注視する處となり捧大の毀貶もどより意に介するに足らずと雖も亦翻て大に省みるべきものとあり、爾來兄等清勵謹慎余輩を指導して本校の良風美德を振起し、世評のあやまれるを、確めんとせり、而して今や兄等はこの世評に上り一校を出て、大學に入らんとす、これ我校をして世評を一拭し、炯爛たる光輝を放たしめ都人士をして前言のあやまれるを知らしむるの一大好期にして諸君の一言一行は此間に一大責任を負ふて立てり豈勉めずして可ならむや、

聞あふく東西兩京學生の風規壞頽すること久しくことに東都に於て甚だしと兄等此間に入るかの墨堤に浮かれく散りまどふ花をして兼六公園にて養へる花よりも艶なる香骨を汚さしむ

る勿れ、墨田のにびれる流をして、犀川の澄ゆる流にたへたる、清き心を染まらむる勿れ、不忍池畔塵にけがれし月影に蓮湖に寫る明日と競ひし赤心の清蕭をみださしむる勿れ、一望蘇漫只折ふ一時をつくりて岸によせさしやける如き東京灣の細波に澎湃たる北溟の怒濤を友とせし魏魂を碎かしむる勿れ

嗚呼諸君や七十餘日の夏期安息日に冲天の翼を戮め銳爪を磨し今や一躍千里學の蘊奧を開くべき真理の鍵を攫さんと欲す、諸君の未來は煌々たるホープの光を以て滿されたり美はしき花束もてうづめられたり、然りと雖も其途や甚だ遠遠にして、諸君の開かんとする龕は其途の最終点にあり決して小成に安する勿れ、

行け諸君此行や之を大にしては國家の爲め小にしては我校のため慶賀して祝とべきあり余等も最早婦女子の嘆をささるべし、而して余輩剪

劣なる才娟介ある性諸君は希望を滿たすに足らずと雖も諸君の懇篤なる教示に隨ふて此北溟に止まり盟て校の良風美習を振起せんことを期す、兄等も亦其地にあつて、碎身奮勵世評の陰雲を一拭し北長校の光輝を中天に赫々からしめよ、今や秋氣日に加はり、颯颯たる金風は炎塵を一掃して、冷露袂に宿ると雖も季節不順の境に入る、諸君はみれ九鼎の身大に自愛あらんことを望む

(杜鵑子)

望新入生諸君

大火西に流れて爽氣水の如し正に是れ塞馬風に嘶き旌劔星に閃くは時男兒の快心焉んぞ此時に過ぐるものぞ、況んや吾人の多倖ある新に復た東西一百の俊髦健兒と提携するの好運に際したるおや、

嗚呼諸君は永く故國の山河に伏し空しく脾肉の嘆に堪へざりし者今や來て吾が辰章の宏堂に立

ち其夫縱の奇才を放ち旌宥の霸氣を奮はれんとす吾人は我校風が將に諸君の力に藉て益々其光彩を發耀するもの有る可きを信ず、由來金城の地百萬人封の遺風を受けて人情懦弱に風俗淫靡なるやの恨なき能はず然れども獨り我校は此間に立ちて學徳共に高く禮樂是れ修り儼然として市井の飾表と仰がる吾人は此点に關して最も諸君の省慮を促て常に校風の發揚に留意せられとを希ふ

若し夫れ元氣なるものは青年の命脈青年の血液一日も欠く可ざる所否寧ろ進んで之を培養發達を計るは吾人青年の務む可き所に非ざや看よ白山は袂褱として高く雲に聳へ玲瓏素衣を翻へすが如く蓮湖は蘇渺として遠く天に接し晶々明鏡を磨するが如し諸君此間に傲嘯し日夕磊塊の鬱結を放たば冀くは元氣の修養を得るに庶からんか嗚呼陸行りば豺狼を斬り水行りば鯢鯨を

斬る男兒須らく這般の勇氣なりける可はず嗚呼男兒須らく這般の勇氣かかると可はず彼の儒冠を窃みて徒らに讀書の蠹虫とあるが如きは斷つて諸子の爲に取らざる所なり

時習寮茶話會

一つ棟の下に住み一つ竈に飯を食ふもの若し一家族と稱するを得ば、寮生たるものは確に一家族あり、されば其團樂和樂はさることながら、一碗は茶數個の菓子と氣霽々一堂に會して、天真爛熳に歡を盡す時習寮の茶話會こそ、げに君子は會合おれや、寮生中卒業の榮を擔ふべき諸氏の送別を兼ね、學年最終の茶話會は五月廿八日無聲堂に開かれぬ、北條校長を始め今井舎監大島宮本雨谷内田諸先生の出席あり、諷刺的談話を試みらるゝあり、諧謔的演説をもれさるゝもあり、寮生も交る々々立ちて己がト、獨得の妙を演じて興を添え、堂外は夏とは云へ越路は

春尚深く雪解の白山嵐袖猶寒きに、堂内は師弟情濃に友情暖く、互に胸襟を開き、心のゆくかぎり歡を盡して散會せり

り、美風は益々盛なふしめ、やがて書生會合の好摸範とせられまほしく思ひ居たるに、思ひは同ト新寮生も、秋漸く老ひて白露玲瓏たる九月廿五日を期して、例により無聲堂に茶話會を開きぬ、會食を終りて午後五時半一同席に着くや、今井舎監は肥滿なる體を起して寄宿舎に關し徐に訓戒する所あり、櫻井樂學教授は體育を論じて弓術を奨勵し、次で北條校長は起つて北陸の天候を利用して心膽を鍊り以て將來の大成を期せしと述べられ、其他矢板明石兩教授の滑稽演説は新舊を代表せるが如く孰れ劣らぬ可笑味あり、寮生牛塚氏と佐野舍務主任の演説は親子の應對の如く、主客團樂充分の歡を盡し八時半散會せり、唯新寮生諸氏は初會の事とて兎

角遠慮勝なるが多く、胸中萬丈は氣餘を拜聽するを得ざりしは大に遺憾なりき、尙當日は中野谷井藤井三竹諸教授、福見松田宮川三舍務掛も出席せられたり

青年節酒會發會式

前學年末以來熱心なる佐野舎監と設立發起人の盡力により、此程に至りて創立を告げたる青年節酒會は、九月廿四日午後二時より、倫理講堂に於て、發會式を兼ね第一回入會式を舉行せり、贊助會員正會員各設けの席に就くや、倉茂範行氏は發起人と代表して會の成立と、幹事當撰者の披露を爲し、次に幹事の一人田中秀知氏は會頭推薦、現在會員數等諸般の報告を爲し、次に鷹見繁氏は發起人總代として發會の旨趣を述べて曰く、酒必ずしも有害無益と云ふべからざるも、一度其量を過すに及びてや、健康を害し課業を怠るは勿論、其甚しきは泥酔の醜態

百出云ふに忍びず、品性を汚す柳も幾何ぞや、人動もすれバ猥りに狂水に酔ふて得々豪傑を氣取り、清濁併せ吞むは男子の本領なりと誇言す思はざるの甚しきものなり、如此き者を以て豪傑と稱するを得ば裏店の八公熊公は大々の豪傑あり、天下豈此理あらんや、吾人高等學校の學生たるもれ豪傑を扮し、性を下し、車夫社會と撰ぶ所かさに至らば、何の面を以て社會に對し、後進年少者の摸範たるを得むや、是れ本會創立の必要を感せし所以にして、發會に際し敢て一言する所以なりと、次に贊助員の一人を

して佐野舎監は諸種學校の職員數と、學生々徒現在數とを挙げ統計的に節酒を起せしと、若し此等諸學校にして節酒會を起せしに至らば、本會は其卒先者たる名譽を得べしと、望を將來に屬して壇を下り、北國新聞主筆權藤震二氏代りて壇に上り説いて曰く、吾輩は直接に社會の

來事に接すること多きと以て、比較的能く其事情に通ず、人多く犯罪原因を以て酒に歸するも、此れ如きは未だ精緻なる觀察と云ふ可らず、欺偽竊盜不義不徳を爲す者と雖も誰か其罪惡たるを知らざらむや、知て尙之を爲す是れ良心制裁の薄弱あるが爲かり、支那人は亞片に耽りて自ら生命を縮む人皆笑ふ所あり、然れども彼等豈亦其害毒を知らざらむや、知つて之を止むる能はず亦同一の事情によるものなり、酒に溺るゝもれも亦多飲れ弊を知らざるにあらざり、知つて之を節する能はざるあり、此れ如き者焉、彼の支那人を笑ひ、不義不徳漢を譏るを得むや、今や諸君は節酒會を起せ、之れ諸君良心の制裁力外に發顯せるものなり、諸君勉めて止まずむば風俗改善の卒先者たるを得むと、次に北條校長は音吐朗々本會を賛成する意を述べて曰く、凡そ物を節するは之を禁ずるよりも難し、禁酒は必ずしも爲し難かつず、飲むべきに飲み飲むべうらざるに飲まず、飲で而も亂れざる節酒に至りては、寧ろ理想的のものにして、曠世の豪傑と雖も蓋し爲し易からざる所なるべし、然れども若し一たび趣意書に云ふ所の克己自重の精神にして煥發されむか、如此きは易々物を囊中に探るが如きのみ、又能く忠告善導の實擧むる、會の効は立所に顯れ、會運忽ち勃々たるべしと、例を歐米の「テンプレート、ソサイチー」に取り諄々數千言倦むの色なし、村上先生は例に莊重なる語氣を以て、例を古今に引いて詳しく節酒の利を説き、老後の悔を談じて年少を誠戒されたり

之より第一回入會式に移り、今井副會頭は新入會員に向つて堅く會則を遵守せむとを望み、新入會員總代は立つて左の宣誓を爲せり

生等己に本會の趣意を賛成して入會せる以上

は本會設立の趣旨を躰し會則を恪守し敢て毫も戻らざるべし署名捺印茲に之を誓ふ

會員諸君造次顛沛にも此宣誓を忘るゝなくむば冀くは効を擧ぐるを得む、式は午後五時を以て終れり

吊青木愛三君

明治丁酉五月同友青木愛三君病を以て金城に霸窓に易簧す嗚呼哀哉君は美濃の人、賦性温良舉止清楚、其人に接する誠信を以てし其己を持てる端莊を以てす、嚮きに我第四高校に入り攻學研鑽夙に同學の推擧する所となる、一旦劇疾に嬰り遽然寤めず、芳魂忽ち落花に伴ふて去り玉魂空しく流水に隨ふて逝く、參商南北路百千を阻つ嗚呼哀哉、予儕幸に同窓の親交を辱ふ一螢雪臆を同ふし風月樂を共にす恍として猶昨日の如し、而して今や則ち亡し、有爲の才遠大の志未だ以て其抱負を伸ぶるに至らざりて君己に永

く逝く哀哉、良玉全うならず芝蘭瘞るへ易し天乎極まり罔し何ぞ之を奪ふれ速かある、噫紅塵香として路漠々白雲一片去つて何れの郷にか之く青山杜宇空しく殘春を哭し夜雨寒蛩獨り傷感を増せ、悼働の懐ひ曷れの月にして己まん哀夫哀夫尙くは饗けよ(法二)

寸鐵

○節酒會、飲まぬ人は入會せざるべし、飲む者は入會すべからず、よく節する人は入會すべし、節酒會讀んで字の如し。

○ア、予輩は己に幾多の「アグリッパ」を有す、今日欲するものは只夫れ一の「メセナス」乎

○由來武士的根性なる我國人が如何に拜金化したるかを見よ、あはれ拜金教なるものは殆ど四千萬同胞が渴仰歸依するの「一宗教」とされり、武士も之が濟度を受け學者も奴とならんとす、予輩は拜金宗の爲めに萬歳を唱へざるを得ず。

○拜金宗必ずしも悪しと云ふにあらず、若も拜金は利己主義なり利己主義は他と相容れず此宗の僧も之が爲めに棄捨を受けず尼亦之が爲に斃るゝとあふば極樂の道に誰の引導せんあわはれ(以上平四文生投)

(尚ほ若し一節の錦什は英字の不明なる爲り乍遺稿本號へは掲載せざる事と更に再稿あらん事を切望す 編輯小僧)

○天高く氣清し、男子肥肉の嘆あるべし、顧みれば校庭寂寥蓬草離々として隻影なし、往年球飛び健兒走るは勇狀今や見るべからず、蓮湖の繰艇亦聞くなし、哀むべき哉

○教育家學生を警めて曰く、時事を談ずること勿れど、然り學生にして時事を談ずる、決して賞賛すべきに非ず、然れども卑劣の談笑を喜ぶに孰れずや、時事を快談する者、未だ其品性を害せざるあり。

○曾て一學生の言を聞く、曰く放校されざるの範圍に於ては教師に抗するも可なりと、嗚呼

彼等の柔順は無氣力あるが爲なり、彼等は卑屈あり、諂諛あり、而して偽善は教育者は甚はざ彼等を喜ぶ。

○校門を入て左し博物教室に行かんとす、門衛驕然叱りて曰く、右せよと、吾人は裏門の開放さへも望まんとす、誰れか必要もなきに迂路を取るは愚をなさむ、煩令徒に累をなす、豈に微功だもあらむや、是をしも尙は規律を貴ぶと言はゞ吾人亦何をか言はん。(以上直言生)

○裏門は開放を勸唱する、否寧ろ哀訴して止まざるもの日も亦足らず、而も當局者は今に至る迄、口之を是認して行遂に之に及ばず、裏門は僅かに肥料漢の一通路たるに止り又切望絶ゆるに至る、誰り能く之が宿意を齎して適く闇下の心證を煩はすの仁術やある、人あり一日之を當局者に直せば曰く規律は又以て動か

せべくもあらずと、之固より當局者全般を視ふに足らず、吾人は又必ずしも校規を犯して猶直言を口にするの迂は學ばずと雖、果して聞くが如くんば吾人豈敢て首肯し黙するものならん、誰う又敢て革新の前情實なしとは云ふ、徒らに繩墨は末に之律し以て謀かんとなかば、よ一雨降るに至らざるの天は望むべしと雖、青天白日の光得て望む可もあらず、之を直言せんか、辿る可き路は有て思は高峯に、宿意畢竟通ぜざらんを氣切りに揉む、黙して止まんか、双臉由來情交正に濃かにして、往々耳を擊鈴に掠めふるゝれ怨あり、早く起きんや眠く、遅ければ叱らるゝを恐る、分際僅うに數十歩にして常に登校間際の周章方を演ず、惟ふに吾人は獨り我儘を吐く者に非るかかふんも、亦同感の士校擧に違わらざるあり、若し夫れ當局者にして任俠聊かもなく、責務

は只其口吻に啾々せざるのみにあらず、吾人は大々の直言面を犯すに寸歩だも躊躇する所かけん、希くば宜く事の外に身を措き、詳りに利害得失の情を公明視察し、寛太の措置わかんを願ふや切あり、人若し欲する所に致すの誹あらば、吾人は快く甘受せん、更に語は敢て贅するを用わず、切に滿腔の宿意を口端に述べて大聲致思をなす所のもの、は裏門の開放！(眠坊)

御断り

○玉稿は積んで山の如く、聽て綴るに周章てゝさる、狼狽を期して小僧は將に狼狽に仆れんとするのへまに立到り申候事、本懐此上なく返すゝも叩頭此事に候、乍去紙面固より限あり紙數亦限あるものゝ如くにも候にや、不都合極まる編輯員と忙はゞきに追はれ給ひし舊來の諸君は、舊學年に此編輯を企つるも

四回にして僅のに發刊は三部に過ぎ申さず候、由來時々の花雪を見て驚入の次第は夙に本誌の通弊として更に亦一特徴と心得來りしものとも被覺候、類を追ふの不仕末にてモ候か、晩春以降の記事は尙ほ編輯員の手に累々たるの不届も今更に是非なき事にも候へば、一季遅れて面白からずの記事も夏期の煮物と變りかく、さりとて煮置き仕る事も不相叶儀と誠に憂多き次第に候儘、玉稿中時に時季に關係深うゆゆ玉莖と見奉り候錦什は、乍憚次號の分へ差廻はし候御無禮も定めし不少儀と奉存候、決して規則に相違仕る範圍内に於ては沒書かぞ致す如き罪障は相重ね申間敷、爲念一筆御斷申上候

○新たに寸鐵欄を設けていらざる無駄骨と企圖仕り候へ共、寸鐵以外の錦什迄も原稿紙外の紙片に認め投稿ありし諸君も不少誠に迷惑仕

候、之れ偏へに不文故に拙意御取違へ被爲候共、且は原稿紙の所在御披露申上ざりし爲が共被存候得共、右は全く紙類の如何を問はざる様申上候は單に寸鐵欄の投稿に限る短文はみにて、又原稿紙は日常圖書館内に調へ置候間以後は此邊確と御合点有之度候

○重ねて望ましくも候事は、如何なる種類のものたるを問はず一切必ず楷書にて認められ度校正の徒勞を晒笑さざる、如き御慰みは眞平御斷申候 (編輯小僧)

○闘論會記事は豫告仕候通り掲載可仕筈にも候處論題已に「極東の將來を豫想して我は英露何れに結ぶべきや」如此にも候得ば記事の不文は往々物議を醸し兼て規則違反の箇處も不少候間乍遺憾掲載不仕事といたし候之と申すも日頃横着な露子が自得の非運叩頭此事に候無駄骨のへまを演じ候露子の胸中御諒察有之

度候

諸君若し強ひて辨士の卓説を叩かんとなれば去て老松に巢くお孤鶴の清涙を呼べ

第四高等學校青年節酒會廣告

設立趣意書

嗚呼誰れか節酒を不可なりと云ふ、過飲せば則ち亂す、醒めて後に之れを想ふ、得る所ありとなす、將た得る所失ふ所を償ふに足ると爲すか。此二者の得失は辨を待たずして知る可し。夫れ飲食は生命を保全する所以のものにして而て又身を害し命を殆ふする所以のものなり、或は食を節する者あり、未だ飲を節する者多きを聞かず、偶々相會して杯を擧ぐれば互に強ひて飲しむるを快となす、光陰は之れが爲めに費へ、學資は之れが爲めに乏しく、學業は之れが爲めに廢たる、岐路に迷ひ邪道に陥るも等しく此れが門戸をかきものは豈痛飲沈湎の通弊にあらず

や、痛飲沈湎は體質を毀損し、心氣を消耗し、智慧を昏昧にすとは、今の學を修むる者皆能く之れを知らん、知りて自ら戒むる能はず、頽然以て風を爲す、克己の心、自重の念、其れ何處に求むべき乎、苟くも此心念なし、而して尙且つ一個男子と云ふ、余輩は我が同朋の間に此の如き人あるを悲しむ、

語に曰く滋蔓せしむる無れ蔓すれば蔓草だも猶ほ除く可らずと況んや痛飲の弊をや、其弊の滋蔓せざるに當り請ふ諸君と共に節酒會を設立し、飲まざる者は飲まざるとし、飲む者は自ら戒め、人には之れを強ゆることなく、以て克己自重の心念を養はん、忠告善導は朋友の道にして我會員の責務とする所、之れに依りて飲酒に伴隨する凡百の弊害を防止し、除却し、之れを内にしては校風振作の原動力とあり、之れを外にしては國家の元氣命脈を養成するの柱礎たらんと欲

す、本校に在るの人士は學生たると否とを問はず、奮びて此趣意を賛成し舉りて會員たふんことを冀ふ

明治三十一年七月四日

第四高等學校青年節酒會設立發起人

敬白

會員證票を佩び自己を警醒すべし
第四條 本會に入會したる時は本會所定の證票を自辨するものとす賛助會員中自他警醒の爲め此證票を佩用せんと欲する篤志者も亦自辨にて之れを受くることを得

青年節酒會會則

第一條 本會は第四高等學校青年節酒會と稱す本會の目的は飲酒に隨伴する凡百の弊害を防止し校風の振起、國家の元氣を作興するに在り

第二條 本會の會員たる者は己むを得ざる場合に於て酒宴の席に臨むも自かふ主として之れを催すべからず酒宴の席上に於ては自ら過飲せざらば勿論他人に強て勸む可からず

第三條 本會々員は酒宴の席に臨む時は務めて

但入會者の姓名は其都度告示する外更に北辰會及十全會發行の雜誌一欄を借りて之れを掲載すべし

第五條 本會々員にして本會設立の趣意に戻るの行意ありと認むる時は本會の評議を経て之れを除名すべし

但し此場合に在りては東京、京都の兩大學及各高等學校並に尋常中學校に於て發刊する雜誌の一欄を借りて其姓名を掲載することあるべし

附則

第一條 本會々員を通常會員及賛助會員とす通

常會員は第四高等學校の學生を以て成り賛助會員は本校の職員並に卒業生及校外同好の士を以て成る

第二條 本會に會頭副會頭各一名幹事若干名を置く

第三條 正副會頭は賛助會員中に就き通常會員之を撰出して推戴す

第四條 幹事は醫學部生中より二名乃至三名大學豫科一、二、三の各部學生中より一名乃至二名を學年末に互撰し次の一學年間を以て其任期とす

第五條 本會則第五條の場合に於ては會頭は賛助會員の若干名に臨時評議員を依囑すべし

第六條 幹事は本會則第五條に依り除名せんとする場合に於ては評議員の任に當るものとす

第七條 各幹事は毎學年の始めに於て新入學生を勸誘して入會せしむることに任すべし

第八條 會費は一學年間に金拾錢とし每學年の始めに於て幹事之を收納し學年末に其收支決算を報告す

第九條 本會の會則及附則の條項は通常會員二十名以上の申請又は會頭の意見に由り總會議を経るにあらざれば之を更改することを得ず
明治三十一年七月五日

青年節酒會

正副會頭、通常會員及び賛助會員の姓名は印刷の都合により次號に譲る

明治三十一年十月十五日

青年節酒會幹事

趣意書に云ふ所の外にしては國家の元氣命脈を養成するの基礎云々に關し、佐野助教の演說中一例として擧げられは左の統計表あり、之は文部省第二十四年報即ち二十九年

十二月末の調に依るものありと、教育界の大勢を知るの助にもとて茲に附記す

學校種類	男生徒數	男教員數	計
東京帝國大學	一、八三三	一七二	二、〇〇五
高等學	四、二三一	二八九	四、五二〇
公立尋常中學	四〇、七七八	一、七一〇	四二、四八八
公立師範學	七、二〇六	六四八	七、八五四
公立專門學	八、六八四	六一七	九、三〇一
公立技藝學	八、八三〇	五八九	九、四一九
公立各種學	五、六二三	二、三九七	五、四〇二
公立實業補修學校	四、六二三	一一七	四、七四〇
私立實業補修學校	一二七、八〇八	六、五三九	一三四、三四七
尋常	二、〇九九、六六三	五七、二四三	二、一五六、九〇六
高等	〇、四三三、六〇九	一一、〇四一	四四四、六五〇
小學校	二、五三三、二七二	六八、二八四	二、六〇一、五五六
尋常	二、六六一、〇八〇	七四、八二三	二、七三五、九〇三
高等	二四、四六七		
尋常中學三年以下ノ生徒	二、五三三、二七二		
小學校	一〇三、三四一		
以上ニ掲グル生徒數ヲ扣除シタル殘數			
合計			

生徒及教員ニシテ飲酒セザルモノ ヲ半數トシテ推測數	五一、六七一	三七、三九四	八九、〇六五
一ケ三升ヲ減シタル酒量高	五一、六七一	三七、三九四	八九、〇六五
一ケ年ノ減酒量高	七、二〇〇、五二二	四、四八七、二八	一一、六八七、八〇
一升三十錢ト見積リテ算出シタル酒價	二一六〇、一五、六〇	一三四、六一八、四〇	三三〇、六三四、〇〇

備考 一尋常中學校生全數ノ五分ノ三ヲ三年級以下ノ生徒ニシテ全ク飲酒セザルモノト見做シテ概算シ其算出數ニ小學生徒數ヲ加ヘテ生徒數ノ合計ヨリ扣除シ更ニ之ヲ折半シテ其半數ハ全ク飲酒セザルモノト假定シテ推算セリ又教員數モ此折半法ニ依レリ

一以上各學校生徒數ハ文部省第二十四年報(二十九年十二月末調)ニ依レリ



青山歴々郷國夢黃葉滿々風雨秋 元道山

附錄

金石地方行軍紀事

東亞の形勢は日一日より急に、戰雲轉た漠々と 獨英佛は争うて其の呑噬の欲を逞うし西鄰の老して、危機益々迫る、所謂歐州の四大強國、露 呼唇亡びて齒寒し、日東帝國臣民たるもの、豈

に夫れ苟且偷安以て一日を緩うすべきの秋ならんや、生等幸に照代の余澤に浴し、日に簡冊と挿んで學官に登り、耳賢哲の行を聽き、目君子の容を視る、常に以爲らく、一朝事あつて、義勇以て公に奉り上は以て聖恩の萬一に奉對し、下は以て祖先の遺風を顯彰すべきなりと、是を以て比武校技、連年懈らず、今茲四月上游榜示あり、謂ふ、將に來る十四日を期し金石附近に於て一泊行軍を演せんとすと、時正に春風駘蕩櫻華將に綻びんとし、晴光和暢江山笑ふが如し、衆咸な喜躍期の至るを俟つ、

十三日 午後隊伍の編制を行ふ總員四百二十八名分ちて四中隊とし、一大隊を編制す、今其の大隊本部及び各中隊の幹部役員を記せば左の如し、

行軍演習幹部

大隊長 磯田 正 謙
同副官 永岡 亮

旗手 吉村 盛男
衛生部助手 松原 三郎
同 藤井 助雄
同 渡邊 久壽松
同 久保 捨藏
同 神谷 貞二郎
同 田中 健次
同 山岸 理一郎
同 龜田 伊門
同 高木 清吉
同 柳田 友磨
同 番場 友平
同 伊藤 允美
同 月岡 眞備
第一中隊長 福見 常太郎
同 荒木 篤三郎
同 大森 保之助
同 吉川 三雄司
同 森 源之助
同 阿部 政次郎

第一分隊長 曾我部 俊雄
第二分隊長 大石 雄輔
第三分隊長 渡邊 明十郎
第三小隊長 北島 常晴
第一分隊長 稻並 幸吉
第二分隊長 慶松 勝太郎
第三分隊長 大森 篤次
左翼士官 中村 光吉
曹 長 荒井 綠
給養掛 笠井 雄吉

第二中隊長

第一小隊長 近藤 他家雄
第一分隊長 高賀 陽然良
第二分隊長 宮村 隆次
第三分隊長 久保 田整
第二小隊長 荒木 三郎
第一分隊長 森 郁孝郎
第二分隊長 宇佐 美全賢
第三分隊長 永田 茂穂
第三小隊長 江間 圭一

附 録

第一分隊長 松原 武
第二分隊長 秦 又四郎
第三分隊長 杉本 勉吉
左翼士官 田鶴 濱次吉
曹 長 東 郷 直
給養掛 松田 菊治

第三中隊長

第一小隊長 深澤 新一郎
第一分隊長 田中 秀知
第二分隊長 高瀬 修良
第三分隊長 大 津 胖
第四分隊長 二上 兵治
第二小隊長 福井 喜彦
第一分隊長 篠原 甚一
第二分隊長 赤澤 欽次郎
第三分隊長 隈 川 豊
第四分隊長 鈴木 庸生
第三小隊長 山崎 三郎
第一分隊長 三谷 美種
第二分隊長 柏原 省私

第三分隊長

長谷川 勝三

行軍演習役員

第四分隊長

田宮 春策

統 監 部

左翼士官

原田 永治

曹 長

佐々木 菊若

統 監

第四中隊長

市川友次郎

副統監

第一小隊長

宮川 爲三

統 監

第二分隊長

生沼 曹天

統監部員 統監付

第三分隊長

高橋 常作

同

第二小隊長

深見貞之助

同

第一分隊長

田中 次郎

同

第二分隊長

吉田 幡誠

同

第三分隊長

中島 嶺三

同

第三小隊長

河野 勇

同

第一分隊長

小林 茂樹

同

第二分隊長

田中 正一

同

第三分隊長

神坂 勇治

同

第一分隊長

近郷 重孝

同

第三分隊長

富田 稔磨

同

左翼士官

石森 國臣

同

曹 長

渡 宇真

同

北條 校長

高安 主事

中野 教授

大島 教授

矢板 教授

雨谷 講師

宮川 教授

内田 講師

野田 教授

河合 教授

草鹿 講師

村田 助教授

加藤 副手

但高山正教授臨時代理

大隊本部

大隊長

磯田 講師

同

宮川 囑託

設營部員

市村 教授

四月十四日 午前六時衆結束して校に昇り武裝以て令の下るを俟つ、是の日や天麗らかに風靜に意氣爽快限りあり、午前八時二十分磯田教官一同を校庭に整列せしめ以て武裝は檢閲を行ひ畢て行軍一般方略を示さる。

會計部員

蒲原助教授

一般方略

得田助教授

一、小松方位より濱街道を北進し南軍支隊は四月十四日美川を發し行進を續行す、

島 副手

二、南軍支隊の行進を防止する目的を以て北軍支隊は四月十四日金澤を發し金石方位に向ひ前進す、

山瀬 雇

午前九時許吹響喇叭、元戈輕車肅々として校門を出づ道傍仰ぎ觀る者老幼婦女手を額にして喜

山崎 教授

悅涙下る進むこと數十百武石浦町に至る比ひ、

岡田 剛吉

號令全軍を徹して大隊は歩武を駐めぬ

加藤 慶三

是に於て軍を南北に分ち第一中隊第四中隊を以

衛生部員

中隊本部

中隊長

福見助教授

同

日下助教授

同

松田 囑託

て北軍とあし、第二中隊第三中隊を以て南軍を組織す、

北軍支隊は金石方位に向ひ港を距る十數町道側に小憩し田畦の間を過ぎて、日本海岸に薄り一松林の中を過ぐ、時正に午前十一時半乃ち糧を使ふ、清風習々として襟を拭ひ犀川の流晃漾颯々逢に金澤市街を指顧の間に眺め左は則日本海渺茫として煙波千里遠く布帆を水天一髪の際に望む食後休憩三十分許、午后零時廿分磯田教官は全軍を以て圓陣をつくり此より對抗の演習に移る旨を告げ北軍は其帽に附するに日覆を以てせしめ自ら審判官に移る、是に於て福見中隊長は代つて演習に關する命令を述べたる

北軍枝隊命令

一、南軍は昨夜美川附近に出没せるの情報を得之が行進を防止するの目的を以て當枝隊は此地より美川方位の濱街道附近を警戒すべし

二、本隊の命令に依り當枝隊は午前十一時に至るを以て休止護衛の法を執る、

三、第一及第四中隊は前哨を配布すべし、是に於て第一中隊の第一小隊は小哨とありて海岸の沙丘に據り其前方凡そ二百米突の所に歩哨を配布し以て前方の土地を警戒せ、第二小隊第三小隊前哨中隊とありて小哨を距る凡そ三百米突後方の森林に據らしむ、而して第四中隊は犀川の西涯蘆葦州渚の間に匿れ、均しく前哨を配布し敵の動靜を窺ふ午後一時卅分に至り、未だ敵の隻影を見ず、枝隊長は、因て前哨を徹して更に進撃の令を下せり、於是第一中隊を前衛となし警戒中適々第七聯隊の來て武を此に演ずるに會し砲聲殷々として士卒交錯し其の我の運動に阻碍あふむことを恐る、今や軍を前びるに至り、雲霧散りて旭日を見るが如きの感あり行く砂丘を過ぐ時午下二点烈日背を射て熱汗滂々衆皆

頗る苦む、脚は輪退して足前まが瘁歩頗る疲る、

令を授けたる

南軍支隊命令

四月十四日午後零時四十分於倉部村西端海濱

此の間第一中隊の第三第二小隊は前衛本隊となり第二小隊を尖兵に當て敵兵の發見に務めしむ唯憾らくば、聯絡兵の意を留めざるや適々前衛と本隊とを以て甚く遠けしめしに在り北軍の本

一、情報によれば本日午前十一時北軍の一小部隊金石附近に出没すと云ふ、

隊安原村に至る頃ひ一望蒼として盡く是松林、前衛隊は既に歸路を失し、本隊との聯絡に苦み、

二、南軍支隊は本軍の手取川架橋竣工迄、此地に在りて前哨を配附す、

徘徊願望機を誤り、令を失ひしは洵に惜むべし

三、第二中隊は前哨中隊とあり、倉部村北端に警戒線を布け、

林窮して一平地を得西は則ち日本海、浩蕩萬里雲蒸し濤激し碎波來つて砂を噛む東南に當りて

四、第三中隊は前哨本隊とあり倉部村南方森林中にあれ、

以上

爲ぞ、是より先き南軍の第三第二中隊は南進して犀川を渡り右折犀涯に沿ひて西進し、十一時倉部海濱に着し、休憩飯を使ふ同四十分整列火薬の配附其他萬般の準備を終り十二時此地を發し南進すること、約百米突倉部村南端に達するや日下第二中隊長南軍支隊長をして左の命

と因りて松田第三中隊長の率うる前哨本隊は、此地を去り龍畝の間を過ぎ南方約一千米突ある倉部村南端に赴き陣す前哨第二中隊長は更に命令を授け、第一小隊を以て小哨に充て、更に第三小隊の一箇分隊を下土斥候を出し、前方約一千米突の地を搜索せしむ、あくて小哨に當れる、

第一小隊は前哨中隊と距る約二百米突ある倉部村北端の丘上松林鬱茂の間に止まり直に歩哨を出して、警戒怠りなし、一時廿五分前哨中隊は下士斥候來り報じて曰く前方凡千二百米突の地に到り、左右一帯を偵察せしむ、敵影を見ずと、前哨中隊長乃ち傳令を馳せ此状を見して、前哨本隊に報し且曰ふ、前哨中隊は、午後一時を以て、全く其配備を終れりと、かくて南軍支隊長は次の命令を發せり

南軍支隊命令

四月十四日午後一時五十八分於倉部村南端

- 一、本軍は手取川架橋は本日午後一時三十八分竣工す
 - 二、支隊は安原村を経て、金石方位に行進せしむ
 - 三、第二中隊は前衛となれ、
 - 四、第三中隊は本隊となれ、
- 是に於て前衛となりたる第二中隊は直に前哨を徹して行進を起し第二小隊を以て尖兵に、第一

第三の二小隊を以て前衛本隊に充て、更に第三小隊より一ヶ分隊の下士斥候を左方の海濱に出し(南(即右方)の林端迄搜索すべきことを命ず、時に一時五十分あり、既に於て、尖兵に任せられたる、第二小隊は斥候を出して、行進し、更に又尖兵隊より交通兵を出して、前衛本隊との聯絡を保ちたり、此の如にして第一斥候は、中央の水田より、第二斥候は南方の森林より、下士斥候は海邊より進みて、共に前面の森中を搜索す、此時尖兵の密集隊は其斥候の背後二百米突を距て、行進し更に約三百米突を距て、前衛本隊あり、而して本隊遙に之に繼ぐ、實に二時二十五分なり、二時三十分安原村に於て、北軍に遭遇す、因て南軍支隊長は、傳令を飛ばして、本隊に命ず、安原村より展開し左方海邊の小丘に向ひ進行せしむ、二時四十分、斥候走り來り、海邊四百米突の地に、敵を認めたりと報し、此

より斥候の急を報すること櫛の齒を挽くが如し、此時に當りて北軍亦敵状を探知し兩軍遂に戦闘展開を了す、砲聲爆煙塵林樾を罩む、午後三時北軍の前線急馳海邊の沙丘を奪はんとす、南軍之を拒ぎ勝敗俄に決せず、是に於て審判官は命を發して畑地の東方松林一帯の地を通過し得べからざる障害地と見做す旨を兩支隊長に通せられ兩軍は共に西方の砂原に散開す、南軍の本隊は海濱の砂丘に據り、力を極めて、砲聲最も烈しく、銃身熱して持するに堪へず、北軍剛悍頑然亦卻かず北軍の第四中隊は、驀然身を挺して、疾風は如く、南軍に肉薄すること頗る急なり、今や僅に四五十米突れ短距離に達し將に劍芒相交り、鋒刃已に相接せんとす、此れ間南軍砲聲極めて猛あり、適々磯田審判官は、副官を以て北軍は左方にある部隊に退却を命ず、是に於て、北軍

は後進西方の砂地に退却し、障礙の以て身を遮るもれなく、唯だ膝姿若しくは伏勢の儘、敵を仰て應戰頗る努む、蓋し北軍地の利を失むること甚だしと謂ふべし、是の時に至りて、南軍小心翼々、歩を擧る苟もせず且つ進み、且つ砲撃す將士氣昂り三軍齊く振ふ、是より先き北軍の第一中隊第一第二小隊は猶石樹林の中にあり、以て南軍の我が後を襲ふに備ふ、今や本隊は急を聞き、士卒憤激怒髮胃を衝き、風奔電馳來つて敵の左翼を衝かんよと、塵埃天日を掩ひ、砲煙空に溢り喊聲天地を撼き、南軍の一小隊精銳を以て名あり陣を開いて應戰頗る烈しく血戰千數合、互に勝敗あり、適々南軍の第一小隊は私に兵を海岸に伏し本隊の進撃に當り、急に一齊射撃を以て之を掩護し、北軍切齒殊死して戦ふ、午後三時四十分勝敗未だ決せず既に於て兩軍逼迫益々急あり、審判官は乃ち命を發して兩軍均

しく着刃を嚴禁せり、午下四点至り兩軍紛亂々麻れ如く北軍第一中隊第一小隊及び第三小隊は奮迅狂馳横さまに突貫して敵の第三中隊第一小隊を粉砕せんとす是の時に當りて兩軍の諸隊も亦接戰極めて激烈に呐喊電の如く山嶽崩んとす、死屍は山積し、流血杵を漂し殺傷無算是に於て休戰の喇叭は嚙啣として起り小憩れ後磯田審判官は兩軍を一場に整列せしめ左の審判を下せり、

一、北軍支隊は前哨の配備に就ては敢て謂つべき程れことなり併し一般に氣概に乏しく統て此動作敵前に於けるものと見ることを得ず

一、前哨を撤し警備行軍に移るや凡ての警戒充分ならず殊に尖兵の如き多くは連絡を失せしもの、如し

一、右等不都合なる結果の來るは畢竟野外の演習は單に敵の眼前に於て發火せるもの而已と

の誤解にもあふざるか己後大に注意すべきことなり

一、兩軍支隊の彼の森中に遭遇するや、南軍支隊約一小隊の兵が、北軍支隊の約一小隊半の兵と出會し、敵の兵數及地形を鑑み、直に退却して後方適當なる地形によりしは、適當なる動作と考ふ、但し南軍支隊の一部り、位置を海濱に移すや敵前に於て側面運動をなせしは甚だ不可なり

一、兩軍共號令確實ならず又突撃を行ふ前にあつては甚だしく近距離にありて永く射撃を持續せるは當を得たりと云ふを得ず、南軍は稍々地形良好かりしも、事茲に至れば速に突撃を決行するより外なきもの考ふ、

一、尙余は終始北軍支隊と行を共にせしを以て南軍支隊の遭遇するに至るまでは毫も南軍支隊の運動を見ず是は大島教授に托し置きたる

を以て同君より適當なる審判あるべし

次に大島審判官は審判あり曰く

一、命令を慎重せざることを、下命者受命者共に之有り從て速斷及齟齬を來せるも甚だ多し

一、命令は範圍内に於ける獨斷に乏しく屢々好機を逸するを見しは遺憾なりき

一、右二條欠点の結果として動作の緩慢と兵力の徒勞を惹起せしは止むを得ざりしなり

一、行軍に移る際に於ける尖兵長の命令及所置は其當を得間然する所なし

一、行軍中尖兵長は遠く前方に進み尖兵は其掌握を離れ敵と初めて衝突するに當り迅速に其長の命令を傳ふる能はざりしは警戒隊の任務を完ふする道に非ずと認む

終て兩軍は南北に分れ南軍は金石に北軍は松任に各其宿營地向へり

十五日(行軍第二日) 午前四時三十分起床の喇叭

叭一聲海濤の聲々に連りて魏貅三百の壯夢を破るや昨宵金石港頭に宿營せる第二第三の二中隊

(昨の南軍)の士卒蹴起探甲結束して皆立つ五時三十分出發の令は下りぬ乃ち一同咄嗟馳せて行軍演習本部前に整列しやがて隊伍肅々勇ましき喇叭の嚙啣に導かれて宿營地を去り道を茫々たる田郊に取り南を指して進發す時に朝霞縹緲遠山を罩めて近水に連り若草萌ゆる江堤滿目白露を含んで枯梢珠を轉し四邊人未だ噪がずして炊烟搖曳林端を掠め乾坤氣爽にして涼味人の肺腑を洗ふ乃ち前日轉戰の疲困一掃せられて体は胖に足軽く壯士の意氣軒昂擅に虹霓を吞吐するの概あり既にして曙光一輝東山斷霞の中に現はるゝや春禽碧蒼に啼て双蝶水邊に舞ふ六時五十分歩武堂々奮躍して安原村に着し休憩後彈藥を配附し第三中隊を先頭として此村の一端に出で北方海濱の松林に連る翠綠鬱茂の地に於て昨夜松

任に宿營せる第一第四二個中隊(昨の北軍)と會合す先是黎明松任町に宿營せる第一第四の二個中隊は又宿營地を發して北進し金石の別軍と相會せんとて此地に來りたり

依て午前八時二十分磯田大隊長全大隊を重複縱隊に併列せしめ音吐高朗今より大隊の展開演習を行ふべき旨を告げ且つ語を續て曰く

今演習を行ふに先ち念の爲め一言注意を述べん凡て野外演習上敵を設くるに於て三種あり曰く
假設敵想像敵實設敵是なり

實設敵とは事實上敵を設け之と對抗する者にして想像敵とは單に想像上に敵を設け之に向て演習を行ふの謂にして假設敵は殆ど前兩者の中位に立つとも曰ふべく多く實兵を使用せずして假りに或部隊を表示せる旗幟を用ひて敵を表はし之に對して演習を行ふ者とす而して以上の三者其孰れたるを問はず均しく皆精嚴なる幾多の練

磨を要し實習の功を積みて後始めて適實に之を行ふを得べきのみ今回行軍演習の部隊として編成せる大隊中或部隊の如きは未だ會て大隊の密集教練の如きも幾回の訓練をも經ず又既に一旦訓練を受けし部隊と雖ども久しく練習を缺きたるの憾なきに非るなり故に今此大隊が假設敵演習を行ふに於て既に前段の弱點あり諸子は須く謹肅整嚴敢て苟もせず進退起伏能く各長官に命に遵ひ妄動輕舉漫りに法を侵して識者に嗤を招くなかふんことを期せよ

大隊の散開も中隊の散開法と格段に異なる所なし即所要に應じ遂次中隊を戰線に増加するものにして其他の中隊を預備隊とかりて常に大隊長の主裡に集むるれ大隊散開の梗概に過ぎざれば今大隊の戰闘演習を行ふに當り大隊一般の操縱進退は余之を令して中隊毎の戰闘法に關しては宜しく各中隊長に指揮に従ふべし

次に演習の方略は昨日に繼續する旨を告げ且左の想定を示さる

一、昨日の戰闘方さに酣にして日暮れ爲めに勝敗を決する能はず依て松任に退却せる南軍は今日新に二個中隊の應援を得て大隊を編成し乃ち警戒を加へつゝ濱街道を北進し此地に來れり(假想)

一、斥候は報告に依れば此地を距る前方凡一千米の地に敵れ一小部隊を發見せりと依て大隊長は直ちに前進して既に地形等の偵察を了せり故に今より戰闘を開始すべし

假設敵に就ての注意

敵は帽に日覆を附す

敵の一赤旗は一個中隊を表示する者とす

八時三十分終る是れより各中隊は夫々中隊長より注意を與へるゝや磯田大隊長次の命令を下して曰く

第四中隊は戰闘線となり其他れ中隊は豫備隊となれ

此の如くにして八時四十分大隊は戰闘隊形に移り展開の命を受けたる第四中隊は直ちに先頭小隊なる第二小隊を以て散兵とかし岸沙松林中の一狹路を挟み十分ある散開距離を取りて徐ろに前進し巧に松樹の掩護物を利用し砂丘の起伏に従て警戒起伏しつゝやかて砂丘の北端に沿ひ斜進れ方向を取りて前進す殘余の二小隊は援隊として約二百米の背後より行進す預備隊も同一方向に約三四百米を距て、行進を起す斯くて散兵れ進んで前面なる砂丘に登るや前方約七百米を距て、金石測候臺邊敵の赤旗翻々遙に海風に躍るありこれれ當大隊の敵として現れたる北軍即ち文學士大島少尉の率ゆる假設敵なりけり赤旗なりけり依て從來巧に比物を利用して前進し來りし散兵も今や前路の松丘全く盡さ遂に平

砂中を進まざる可うざるよりして宮川中隊長は第二小隊は更々に右方より一齊射撃を試み第一叱咤十分ある警戒を加へ其一小隊に令して左翼の丘阜に據り一齊射撃を以て極力左翼線を掩護するや左方平砂中に散開したる散兵線は暗啞勇を鼓し敵の赤旗を目掛け測候臺丘に向て直進せしが先頭中隊中左翼援護に當れる南軍の一部隊は午前九時七百米の距離を以て爆然發射し平砂中を散開行進せる散兵は左翼は漸次斜に右方に近進して一丘に攀ぢ六百ヤードを距て徐ろに敵に向て射撃を開始せり此間中隊長は是迄南丘に在りて左翼を援護せる其第三小隊に命じて伍間増加を第二小隊に命じて右翼増加を爲さしめ益敵に迫近し將軍の令一下せば奮迅將に敵壘を蹂躪して吾先頭の功名を得んざる氣色又掩ふべくもかく遂に進んで約五百ヤードの距離に達するや第一第二の二個小隊は少時發射を行ひたる後

第二小隊は更々に右方より一齊射撃を試み第一小隊は着劍蕭々進んで測候臺下に隊形を匿して發射を停止せり今翻て預備隊たる他諸中隊の形勢を案ずるに第一中隊は先是既に左方松林に向うて斜行進を起し、約三百米にして松樹の地物全く盡き平沙一帯極目海に連る邊に達せしかば乃ち暫く松林點々の一砂丘に隊形を潜伏せしめ鬱勃の銳氣を仰へて以て機の至り令れ下るを待ちしが今や遠く瀕海の岸砂原中に進入し第二第三中隊は戰線の背後約三百米の距離に在りて停止し令の下るを待つ者の如く實に是れ午前九時十分時戦勢なりとす風雲既に斯の如くおるを以て各部隊より必死に打出す銃砲の響は凄まじくして岩角に吠ゆる北浪は激浪に通ひ士卒の縦横奔馳するに連れて湧き上る砂塵は砲烟に混りて暮々空に漲り天色漸く暗愴として海水黒く山河滿目轉た荒涼の觀に堪へざる者ありき此

時に及んで北軍漸時鷲の森方面に退却せんとし既に測候臺邊の壘を去り赤旗を拔て後方約二三百米の林中に出沒防戦に營々たる者の如し斯くと見たる南軍は益勢を得勇を鼓して層一層敵に肉薄せんとす即ち松田第三中隊長は其二小隊を割き之を以て疾驅戦線の左翼海邊方位に散開し殘餘は第一二小隊を以て援隊に充つ先きに一時停止したる第二中隊は戰線の後方約二百米の距離を以て密集行進を起し第一中隊は第三中隊の左方海濱なる形勝の一砂丘に據りて先進隊の應援に當り互に部署を定めて盛に攻撃を加ふ既にして第四中隊は悉く散開して測候臺下の堤邊に迫近して着劍の儘伏射を行ふや第二中隊は益行進れ速度を加へ福見第一中隊長は其一小隊(第二小)を派して散兵線に加へ殘餘の二個小隊を舊位置に止めて援隊たらしむ此の如くして第四中隊と第三第一中隊の一部とは共に同一戰線上に立ちて東西相應せり九時二十分戰線は一齊に進撃して測候臺下北邊に止まるに當り第二中隊は依然同一方向を以て第四中隊の背後四百米の地に進めり既にして戰線は二たび行進を始め測候臺下を過ぎ四百米の距離を以て射撃を試み第一中隊の殘餘も縦隊形を保ちて徐々行進を起すや第二中隊も之と前後し殆ど并行線を以て前進し來りしが其一小隊(第三)は目下中隊長の命に依り馳せて第四中隊の左翼に加はりて前進し殘餘の二小隊は其後方より進んで測候臺邊に達す此の如くして散兵線は首尾相應じ九時三十分五分五百米の距離を以て砲撃す此時に當り第一第二の兩中隊も相平行して百五十米の後方に密集し來りぬ此くて又戰線は既に敵を距る三百米の地に進み來りて着劍し今や鳴る腕を鎮めはやる心を抑へいざと曰はゞと徐ろに射撃を加へぬ敵も勢此に迫りては假令死守して此地に墜るも

到底南軍の支へ難しと察したりけん今又再び赤旗を抜き營を撤して後方林中に退却し始むるや南軍の勢益振ひ乃ち捷に乗じて一舉敵軍を屠ふんとす時に海颯北より砂を吹て天地倏ち晦冥陰霾團々山河を包みて滿目淒涼去れば滿野に亂風そる砂塵黃烟は全軍を窒せしむる許りあるが上にも砂礫深くして脛を没し士卒は困頓名状するに絶え、熱汗滴々戎衣を漬すも之を拭ふに遑なく徒らに砂塵の塗るに任うせ將軍勵聲劍を按トて叱咤すれば士卒砂を嚼んで縦横奔馳し其勵苦又察するに餘あり若し知るならしめば鬼神も爲めに哭し山河も爲めに動きなんされど勇猛なる南軍いりてかは辟易之に屈すべきは是等幾多の危険を物の數ともせず寧ろ此暗颯天變を利用して以て攻撃の資に供せんずる者の如し此時に及んで先には稍後方に在りし第三中隊の一部も先頭散兵線に加はり又今迄遙か背後にありて驕肉

を撫せる第二中隊は一小部は電進して第四中隊の右翼に加はり殘餘を以て援隊とし第一中隊の第一小隊も先頭散兵線に入る斯くて第二第一中隊の殘餘小隊は着劍し援隊として後方より進軍し敵陣愈近くして機雲又愈熟し其間又將に髪を容れざらんとす午前九時四十五分南軍將に突貫せんとし乃ち暗風に乘りて之を背にして襲歩敵を距る僅に百米突れ地に止るや第二中隊も今や全く散兵線に加はり暫時預備隊として進みたる第一中隊も海邊砂丘を下より出で、先頭散開線に加はるに至れり五百の健兒是に於てり蜿蜒長蛇の陣をかり起伏進退首尾相應し銃劍を握りて今や遲しと突撃の命を待ちし瞬間一刹那亂颯を劈きて平野に響き渡たる喇叭急吹突撃の命を傳ふるや南軍血氣の悍夫何のは以て躊躇すべき吾先登の功名を得ん者と雷霆の如く急潮さながら丘腹を魚貫し吾先さにと迅撃突貫するや嗚聲海に

鳴り山に響き銃劍は閃光は塵烟を破りて電霆か

並に行軍全般に就て講評せざる其要に曰く

と惟まれ其壯觀豪況記せんにも筆及ばず人をして

講評

て轉た想を當年の韓山に馳せしむる者あり五百

一、本學年に於ける初回の大隊散開演習として

れ貔貅敵を距る數米の地に迫り敵の北ぐるを追

は大體に就て云へば稍可なり然れども詳細に

ひて敵壘を奪ひ終るや大隊長疾呼一聲令を下し

云へば異見なきにあらざる併し之れは演習回数

第三第四兩中隊をして集合以て不時の機變に備

を重ぬるに從て得べき進歩の結果に期せざるこ

へ第一第二中隊をして敵に向て追撃射撃を逞う

と多きを以て今は其一二に就て述べん

せしむ九時五十分射撃を止め銃劍を收め隊伍

一、預備隊又は援隊の行進にして本朝の演習地

を整ひたる後休憩の令あり時に暗風漸く收りて

の如く全く敵に暴露し且行進甚だ困難あるに

天色靜平に復せんとし天我契合の思なきに非る

係らず必ずして銃を掲げたる模様ありしは如

かり九時十五分整列隊伍肅々曩時の血戰場を背

何此の如き場合にありてと寧ろ正々堂々銃を

にして南東に向ひ幾多の田徑村郊を経て犀川の

擔ひ勇を鼓して前進するを適當と考ふ

北岸に出で之に沿うて上り遂に金城に入り零時

一、命令は實行確實を爲す爲めに屢余の期する

四十五分歩武堂々勇ましき喇叭に伴はれて校庭

所に齟齬せる運動を見たり之れ下命令者又は

に班旋し部隊の檢閲を終りたる後十數分の休憩

受命者の命令を輕視するより起ることに非

を與へられたり此くて午後一時礮田大隊長劍を

るの後來最も注意を要す

按ト儼然大隊の中央に巍立し本日舉行せし演習

一、今回の演習は時期の經過に重きを置らず專

が展開は順序等を明りに示し部隊は運動容易なることを勉めたり故に最初第四中隊をして展開せしむるより最後敵陣を撞くまでは稍運動の整然たるを認めたり然れども突撃を行ふれば後二個中隊に集合を命ぜしに或中隊の如きは些の二三十米後方に敵の洞見を避くるを得べき適當なる個所あるにも拘はらず平然暴露集合せしは全く號令者の不注意と認むるに後來に向て注意を希望す

大隊長は尙語を次で

行軍一般に就ての講評

行軍の全般を観察し其成績を講評するに當て便宜上演習途上宿營の三點に就て述べん而して宿營の點に關しては今回は全大隊を南北二軍に分て金石松任の兩地に宿營せしめたるを以て余は松任なる南軍宿營は狀況如何は知るに由ありきと雖も南軍に屬する各幹部の

報告に依れば敢て不都合なかりしが如し又余の目撃せし金石なる北軍に於ては酒氣の爲め稍不穩當なる一二卒を出したる外(之れは能く記註し置きたり)全体に亘りて瑕瑾なし次に途上行軍特に大隊が歸途金澤市街に入り縦隊行進を取るに當りても靜肅能く軍規を嚴守して本校の面目を汚がさざりしが如き之等以上上の美點ありしは余は深く悦ぶ所ありき又演習の點に關しては業に己に日を重ねて講評を試みたれば今又別に贅するに要さしと信ず此短日子を以てにも拘はらず海濱砂深きの地多くの演習を行ひたることなれば諸子の勞疲亦尠くざるべし

今回の行軍演習に際し殆ど學生の全体が從軍するに至りしこと是れ余の甚だ満足に感ずる

所なり加之連日快時の天氣は各自に向て又一層の快味を添はしめたり而して行軍は擧その期甚だ火急ありしにも拘はらず行軍機關の組織準備の周到整然亂れざる如きは會以て平素の精勵蓄積を下するに足る然れども規律の點に關しては學校としても尙は欠如せる所あるを認めれば從て諸氏は此點に向ひ一段の奮勵を要し戒飾を施し此敵を一洗して又一層の光明を加へんことを期すべし次に本回行軍中に於て時に小波瀾あききに非りきと雖も要するに全体として活潑熱心能く良好結果を奏せしことは余の甚だ喜悅に堪へざる所なるが是に當局諸教官が精勵苦心の致す所に外ならずと信ず

一時十五分校長の告示終るや全大隊は捧銃の敬禮を行ひ大隊の編成を解りたり(藤紫演)

弓術大會記事

無聲堂内竹刀を戦はず音疊を打つ響日として聞かざる無し、獨り堂外の射的響々の響を聞くこと極めて罕あるは抑何故ぞ、實用の點活潑の度に於て或は劣る所ありき、其心膽を鍊磨し元氣を鼓舞するに於て、弓術豈敢て劍柔二道の後に落ちむや、然るに前者の盛るる意氣昂然天を磨する壯士の如く、後者の衰へたる氣息奄々死に瀕せる老夫の如し、此間漸く一縷の命脈を支ふるものを春秋二季の大會とす、春秋大會は四月十有七日例の弓術射場に催されたり、僅に一泊の行軍満身の勇氣を漏すに由なく、歸來腕鳴つて夢結び難く、半夜枕を蹴て腓肉を嘆する壯夫等、之を聞て馳集るもの數十名、市内の老練家亦來り加はり、競射終日、飛箭落花を掠めて蝶袂に戯れ、彈弦春風に和して小鳥囀を止めたり、午後の學生競射に射て中原鹿をし、名譽の桂冠を戴きしを左に十氏とす

第一等 加藤範次郎 第二等 柏原省私
第三等 草野正義 第四等 湯川宗理
第五等 加藤 苞 第六等 早瀬三求
第七等 田宮春策 第八等 高澤辰之助
第九等 山田義忠 第十等 中島擴三
次に五寸の各自競射、來賓學生聯合採點競射等の餘興あり、散會せしは金的尙明を失ふ黄昏時なりき

屈するは伸むと欲してなり、蛟龍豈永く地中に

潛まじや、春季大會は一條の導火線とあり、爾

來斯道俄然として興り、或は正可先生の教を請

ふて着々秘奥を探ふむとる者、或は始より競

射の列に加はりて輪齋を戰場に争はむとするも

の、日を逐ふて多さを加へ、熱心の極秋季大會

を待つ能はず、弓術部の勇士にして錦衣を古郷

に飾る諸氏の送別を兼ね、六月五日臨時大會無

聲堂に催されぬ、此日は的を三尺、尺五、尺二

及び尺の四種と爲し、平日の成績によりて射手

を四組に分ちしを以て、傘大の三尺的那須の冠

者ならずとも誰う百發百中を期せざらむ、而も

日頃手鍊に誇れる士不覺と取らざるもの少く、

尺二、尺的に至りては飛鳥を落し走獸を出す妙

腕も、箭上下前後に落ちて黒點を貫くもの極め

て寥々、されど朝來微雨を犯して終日の競射、

特に一層壯快を覺えぬ、當日賞を得しは左の

三尺 的

第一等 武田正壽 第二等 松山堅太郎

第三等 兒島亮吉 第四等 植木隆太郎

第五等

尺五 的

第一等 佐伯亮齋 第二等 加藤英重

第三等 二宮英雄 第四等 佐藤芳太郎

第五等 高儀文定

尺二 的

第一等 田中正一 第二等 高澤辰之助

第三等 中島擴三 第四等 近郷重孝

第五等 古川義天

尺 的

第一等 早瀬三求 第二等 柏原省私

擊劍紅白勝負記事

三春の行樂既に逝水に送られて、後園の藤架に紫の色深く杜鵑月に鳴て、蒼翠將に滴らんをす。

嚮に返寒の嵐強く六花霏々として朔風聲有るれ夕、可惜鉄腕を撫して腓肉の嘆に苦しみし我尾

山城下六百れ健兒は、此の好期に際して勃々の覇氣又禁ずる能はず、其餘溼の迷る所流星の如

き熱球は運動場裡に飛び、鵬翼れ如き「ボール」は蓮江の濱に白鷗の曉夢を驚かす、將に此れ我

校の靈氣躍て雄飛奔騰の奇觀を呈せんとするの秋あり。於是乎雪晨雨暮常に丁々憂々の音絶間

あき、無聲堂内又搏虎掣龍の活劇無くして止ん

や。爰に我擊劍部は其の精勵熱心なる部員の發

議により、紅(一、三部)白(一部)勝負を舉行す

る事と成りぬ、壯絶又快絶、時は維れ旱月れ半

ば前一日、兩軍戟を交ゆるは將に午後二時とぞ

注されける、期に先ちて場内立錫の地を餘さ

る迄に奔々と詰めつけし戦士の面々は、皆足風

雲を躡し氣斗牛を呑む者、其額を集めて圖議す

る黒幕の内、其腕を扼して放語壯談に餘念無き

胸裡には、如何なる風や起るらん、如何なる雲

や起るらん、天つ御空も此光景に感應せしか、

其れか有らぬか、今迄も拭ふが如く晴れ渡りし

空の俄りに搔曇り、黒雲墨を流し狂風一陣土砂

を捲き木梢を拂ふ音物凄し、忽ち豆大の降電轟

然來り犯し、擔を打ち窓を叩き、少時して雨と

變り、今や滿眼の風物は殺氣に閉され、人をし

れたり、先づは一番鎗の功名に敵の荒膽挫のん
ものと、戰場へ跳り出でしは白黨は大津君あり、
紅軍又何を後れん、白面は豊公然たる慶松君陣
頭に見はれたり、兩者共に技術を以てよりも意
氣を以て勝る者、其滅多打は數の免のれざる所、
殊に大津君の太刀打見るから烈しく、流石の敵
手も漸次受身とありて終に敗られたり、門出善
しと白軍より起る拍手は響を耳にも懸けず、悠
々戰場に臨みしは大森君なり、接戦數合勝負決
せず引き分けとなる、僕をして憚らざる大津君が
技を評せしめば、君が亂打の太刀打は頗る野人
歟と取つて耕すに類する物有り、乞ふ精勵一番
向後の發達を勉められん事を、續いて出でし新
手の武者は紅に丸尾、白に森の兩君にて、英進
の氣に乗ずる森君の太刀先は、何時も危く味方
の焦慮を買ひしが微妙トくもせられたり、敵手
は脆くも小手を落されて退きぬ、然れど技術に
於て一步秀でたる南君の太刀風には堪へ兼ねて
敗れ、次いで出でし白軍の勇士は筋骨逞しき一
箇の好丈夫、此れぞ辰章校柔道の御大將高梨の
君にぞ有る、君は柔道に勝れたる丈け劍道に長
所を持たず、立合の中常に腰車をほのめし、
敵手は巧に此を避けんとする、宛然兩箇の糊搦
水月を探るに似たり、聽て一髪の間に乗じて敵
手を倒せし高君の手腕は大出来なりき、然れど
如何に剛の者の聞へ有る高君も、二宮君の精銳
に會ひては又術の施す所無くして終に敗らる、
嗟二宮君は何たる不運兒や、今や高君を倒し
息吐く間もかく向べし敵は、此れ又柔道の「チャ
ー」左利の擊劍家として、校内の草木迄震慄す
る羅王に如き近藤君あり、如何に敏活なりと雖
も、如何に精銳なりと雖も、二宮君如何で此大
敵に叶ふべき、忽ちにして敗れ、滿岡君其後を
繼ぐ、君は常に試合に於て後れを取りし事無き

の人、双雄劍を取て相向ふ、一が龍と成りて天
に昇れば、他は蛇と成つて草に入る、實に本日
の奇觀、此際雨未だ全く竭まず、吹く風に煽た
れ嘯き續くる木梢の亂調子につれて、切り結ぶ
兩士の太刀先閃光を放たん計りあり、敵味方と
も勝負如何にと氣を揉む一刹那、山嶽崩れん計
りて呻叫と共に、流石の近君を胴切にせし滿君
の腕何時も乍ら天晴と云ふべし、戦は愈々酣と
ありぬ、勝負は佳境に進みぬ、堂内は烈しく動
搖せり、堂外の風雨猶止まず、此時波打つ味方
れ中を推分けて、靜に陣頭に駒を進めしは軀幹
矮少の二士、而も技に於て鏘々の名有る阿部善
君なり、二禮終ると共に竹刀を交ゆる事三四合、
早や面倒さと思ひけん、持てる刀其所に打捨て
し眼覺しき組打の後、敵の首を掻きし阿君の働
き頗る妙、小林君出るに及んで阿君敗れ、佐伯
宮村の兩君は皆胴切の悲運に陥りたり、於是乎
數度の戰場に功を経たる保坂君は見はれたり、
烈しき立廻りの果ては、組打とあり兩士攫み合
ひたる儘、白軍の陣所へ轉げ込み、上を下へと
揉み合ひし末、保君の力及ばず同下敵手は刃に
倒れしは是非も無き次第ありし、此くも頼み少
なき形勢を見るより、野次連に富む白軍の混亂
一方ならず、叫喚喧嘩は急潮は巻き返し來つて
滿堂爲めに破れんとす、此く騷亂の渦中を排し、
微笑を泄しつゝ、頗る氣取る所有るがの如く、泰
然戰壇に佇立せしは近眼子松島君なり、小君
如何に豪奇りと雖も數度の合戦に身亦數創を蒙
る、而て今や此新手に向ふ何ぞ堪ゆべけんや、
松子が一撃の下に忽ち倒されたり、搦君は勝ち
誇れる松子を殺せしも、田村君に敗られ、田君
又齋藤君の面にて倒されたり、齋君は餘威に乗
つて佐々木君を胴切にせしも、佐竹君に小手を
落されて退き、二本君代つて敵を倒し、次で深

澤君との奮闘大に満堂を哄笑せしめぬ、深君の刃を受け損ねて退き、植木君の例の銅羅聲放戎服乍らの打姿先づ以て奇に、二君と向ふに當りて其太刀筋の奇枝さ、或は分れ或は押壓し、互に揉み合ふ態度氣合一として滑稽なうぬは無し、須臾にして兩士一度分れ再び相合ふや、深君は霰と降る敵の亂刀を工に潜りて、遂に二君を胴薙とし、次で出でたる赤澤君とは面白き組打の後、深氏は搔られし面を拵て、面目無げに陣中に退きし等、君は頗る人目を引けり、代つて見はれし栗本君、頑鉄の毛ずね見はに、叱風の如く跳り狂ふて容赦はせじと敵手に向ふ、技量骨柄相伯仲の間に有る兩人は、互に面胴と叫びつゝも揉み合ひしが、栗君の運や強かりけん、技や勝りけん、御面の懸聲諸共敵は脆くも刃の鏽とかり、續いて出でたる尾崎君も、敵手が得意の面に又もや敗れ、田宮君代るに及んで、流石意氣昂りし栗本君も隙間泄る御胴の蔭に敵の刃を受け損ねて退き、植木君の例の銅羅聲放たると思ふ間あく消へ失せて、陣中へ退きしを見るより、氣早の今西君は跳り出して英進突撃、此所を先途と亂れ合ひしも、田君のパテントある胴の一撃に又倒され、代つて出でし曾我部君同じ刃に伏し、次で野崎君の陣頭に見はれし時は、戦既に酣を過ぎて、白軍の諸士多くは皆枕を並べて戦没し、剩す所僅かに野崎君を初め押原倉茂戸川の三氏あるのみ、紅軍は田宮君を初めとし、九名の撓將綺羅星の如く居並べるに、流石の白軍も意氣銷沈して、相顧る者皆憂愁の色あり、兩將大刀を採つて相向ふに、流石の田宮君も數度の戦に躰疲れ、神萎え、太刀筋漸く亂れてパツシブの様なりしが、聽て胃を脱ぎて降られしは詮方なけれど、天晴武夫が臨みし晴れの戦場には、物足らぬ心地ぞしける、續いて紅軍の竹村君打て出でたれど、徒に活氣

逸して野崎君の名をなきしめたり、永松君出でて其仇を報ふ、野崎君出で、意氣稍振ひし白軍今や復沈靜に歸りて、獨り紅軍の氣鋭愈々熾んたり、唯見る白軍の旗下より、衆を排して奮然敵に向ひし朱胴白袴の御大將は、打物採つて無聲堂裡當るに敵なき豪れ者、技術の点に於ての親玉として、名聲我校を壓倒する押原君其人なり、君の一舉一動軽くして然も態度氣合に一点は隙間なく、打靡くる大刀先に雲湧き龍跳る、其の自在宛轉の妙術殆んど端腕すべからざる者あり、敵手も名有る侍大將なれど、押君は靈腕に如何て堪へん、打ち下す大刀虚空を斬つて、態度の額れかゝりし所を、すのさす窺いて快刀一閃、敵は眞向を割かれて倒る、間もあらず、逸つて出でし田中君が霰の如き亂打を、見事に受け流して闘ふ事少時、俄然一髪の間に乗つて、押君が「パテン」の突に勢強く土中に敵を埋めし妙に

は、敵も味方も思はず喝采の聲を舉げぬ、續いて出でし老田君亦押君の御面は絶叫の下に葬られぬ、今は此迄かり押君何かあふんと、橋本君を置きて小兵乍らも嚴乎として壇上に突立ちしは、技術の点に於ては押君と伯仲間にある、平家方の豪れ者西岡君なりき、押君は虚に付け入りて胴を薙ぎしも、薄しとて判者の探る所をあらず、愈々狂つて打込む大刀に隙あり、胴薙とかりしは無念千萬、橋本君立ち向ふて間もあらず、面を食ふて戦没したり、押原君既に敵軍幕下柱石の臣を倒す事五回、意氣軒昂當るべからず、是に於て一時斐せんとせし白軍の英氣復奮起し、諸將劍を撫して覇氣滿堂に溢る、終局の勝敗未だ俄かに卜すべからざる者あり、紅軍は副將中桐君は頗る沈重に場に上りぬ、一は既に敵數人を倒して意氣揚々たる者、宜しく持久此を待つべしと思ひけん、初は程は小心翼々花々しき戦

闘もなおりしが、押君が薄く小手を斬りつけし
 より、俄然局を變つて打込む太刀先鋭く、始の處
 女今は脱兎の勢を以て、遂に白軍の鬼武者押君
 を倒せしは目覺しなれども云ふばうりなし、此
 時迄様子如何にと道共に身を堅め片唾を呑んで
 控へ、倉茂君、すは時を來れ、いでや我が鍛ひ
 に鍛ひし腕を揮ふて、敵を敗らん事方寸の裡に
 ありと、身を躍かして中桐君に向ふ、奮闘駭撃彼
 れ打てば此れ受け、一離一合、此れ突けば彼れ
 掃ふ、須臾も一所に止まらず、あふゆる手を盡
 して戦ふ、丁々憂るの音、空しく空を斬りし太
 刀に宿る懐風一陣、爲に滿堂奮ひ起ちて、或は
 齒を噛み或は腕を扼し、握れる拳に疊を叩きて
 叱咤する白の振起連。氣を焦ち其れ其處だ、エ
 其處だど、炯々たる眼光を光らして焦躁する
 紅の殿原達、占めたと叫ぶあれば、隙いたと教
 るるあり、滿場喧々囂々として是非を分たざる
 の間、見事に敵の小手を落して勝は倉茂君の手
 に歸しぬ、場内は愈々咆吼喝采の渦中に奥深く
 陥りし、裡に優然騒がず亂れず、場に上りし紅
 軍の大將木村君、冷眼稠衆を一顧し莞爾として
 敵に向ふ、技に於ては平常向ふに敵なきも、晴
 れの戦場には謹慎に陥り、動もすれば後れを取
 るを口惜く思ひ、今日こそは我真價を知らしめ
 んず者と、滿身の勇を鼓する此れ。強敵を殲じ
 て竟氣甚昂り、眼中人なからんとする彼。雙々
 相對して活修羅場は忽に現はされぬ、生か死か
 一道の凄氣兩士を覆ひて、狂獅と猛り猛虎と狂
 ふ、然も其一撃二打進退追迫常に一定の規を存
 し、或は奔流の如く或は怒濤の如く、姿を變じ
 易へ、奮闘數時、倉君俄に押壓し來りて敵手の
 たぢろく所を、透さず面を打ちしも唯薄削を與
 へしのみ、續いて胴に斬り込みて太刀先複外れ
 ぬ、焦つて再打込まんとする碎咏の間に乗じて、

木君が打下せし太刀正しく敵の眞向を割りぬ、
 是に於て愈白軍の大將戸川君、睡りし獅子の覺
 めしが如く、悠然立上りて湧くが如き喝采聲裡、
 陣頭遙に馬を進めぬ、等しく是れ大將、其一勝
 一敗こそ實に兩軍終局の勝敗を決する所なれ、
 嗚呼此無限の責任を双肩に擔ひたる兩將の心事
 果して如何、戸君相寄る一步、搏虎屠龍の大活
 劇は演せられぬ、滿堂の衆半は起てり、木君先
 づ小手を得んとしてならず、身を翻して電光の
 如く研込みし大刀憂然音あり、戸君敢て兩斷
 の悲運に陥り、終局の勝は紅軍に歸しぬ、時正
 に五時。木君萬歳、紅軍萬歳は聲に送られて、
 堂外に出づれば、雨後の夕陽麗らかに、軟風袂
 を掠めて、尾山城角鐵笛の聲微らなり。(霞生記)

柔道紅白勝負記事

老鶯は己に去て新鶯は叫ぶ、春の花に殿する牡
 丹の花も、黄昏の雨に褪せてか紫となり、世は

青葉とあつて芳草は將に煙らんとす。豫て評判
 のみ喧しりける、時習寮生と通學生との紅白
 勝負も、愈來る五月廿一日、開かるべしとれ陣
 は眞に、學生扣席に揭示せられしより、無慮數
 百の子弟を門下に集めて、天晴百萬石は御城下
 に一代の名物と仰がる、岩崎入道法賢坊は云
 ふ迄もなく、なも斯道に入て幾年月の、且けて
 も暮ても空敷脾肉は躍つて、江湖に知己かきを
 嘆ずるの勇士は固より、苟も一度無聲堂裡に
 足腰痛めし者に至る迄、此機失ふ可らずと苦心
 經營、楮は我部屋と思へば樂し四疊半に、餘意
 横さまに進つては鬼神をも取控さしどや夢みて
 往々夜半枕を蹴つて起つに可惜夢を破られて
 鄰室の友が嘆きしも幾度か。

陣形己に成り快戦の日は來る、

柔道紅白勝負記事

老鶯は己に去て新鶯は叫ぶ、春の花に殿する牡

丹の花も、黄昏の雨に褪せてか紫となり、世は

紅軍(時習寮生)

白軍(通學生)

大 高梨 恂一

大 近藤 他家雄

謀 紅林 豊治	謀 山口 重作
同 大森 篤次	司 江間 圭一
生 野 園六	深澤 新一郎
佐々木 久二	澤田 堅太郎
植本 隆太郎	平澤 象次郎
福 田 醇	高橋 亨
神谷 秀吉	伊 佐 壽
小林 正旭	清水 賢藏
田中 秀知	竹花 武壽
阿部 元松	村 田 讓
榎戸 利吉	湯本 四郎右衛門
阿部 善次	佐伯 敬一郎
平倉 保市	栗本 貫一
佐藤 男次	池上 四郎
田宮 春策	小野 連三
牛木 新吉郎	芝田 徹心
杉本 勉會	西 川 巖
伊藤 眞雄	三谷 美種
石田 福松	中山 佐之助
中山 清藏	森田 作十郎

高野 新吉 谷 欽 次
 藤原 敏夫 戸川 文次郎
 松山 堅太郎 加藤 範次郎
 南 大 曹
 植村 宇三郎
 中桐 虎頼
 長屋 權太郎
 鷹 見 繁
 倉 茂 範行
 白倉 眞木
 今西 良雄

よし敵は衆ありとはいへ、たゞ鳥合の雑兵原、味方は勢寡なりと雖健腕一臂我々を頼む、勝敗の数は戦はずして夙に明かしく、勝利は己に我薬籠中の物たるを、と白軍の抱負も勇なれば、我豈敢て衆を頼まん、敵左すれば我右し敵右すれば我は左す、虚實前に在り方策は後へに在り、見事古きを任ずる敵の小面も引剝てやは、と紅軍の魂膽亦快かれや。勢寡に屈せざる白軍の豪

氣は固より由ありと雖、紅軍亦焉々衆勢を頼むものならん。鋭氣風發旗鼓堂々、壯絶なりや、快絶ありや、遙かに憶ふ元曆壽永の秋。乳虎は眠獅を伴ふて駿馬一鞭、落付先は么も何所ぞ、いでや場裡の花を尋ねん。

午下二点鐘。岩崎師起つて各自の心得を述べ終り審判席に復するや、兩軍は忝く爰に相揖す。時して獨り翻へる紅白兩旗の下、胡座する驍將勇卒が鋭氣は頓に昂り、殺氣徐るに堂に滿つ、点呼の聲に應りて其陣頭に起つ者は誰ぞ、

紅 今西 良雄氏

白 加藤範次郎氏

今西氏は人も許し己亦許すイータアとして夙に名聲噴々たるの君而も老大の軀幹なる、到底加藤氏の遠く及ばざる所と見たは偏目、足踏鳴らして僅の二秒、見事足拂に脆くも初陣の功名してやふれしは呆氣おし、範君是に於てか小鼻

蠢めかして來れや待つと迎へられしは紅軍の未だ戦はざるに何の怯れず、么も復仇の念おきや君、一卜度退いて又範君の敵手たらず、空敷腰投に殫れて紅軍は更に、

白倉 眞木氏

倉 茂 範行氏

を推せり。紅は範と云ひ白亦範と名告る、宿縁淺かたでや軀体己に軒輕なきの故か、角力では組み組んでは又角力や、勝敗暫く定かならぬ兩君も、一分の引分けと呼びあけられては流石に形勢は頓に變り來る、紅の白の爲に腰投足拂とを以て制せらるゝや、「一本」の聲と共に紅軍は新に

鷹 見 繁氏

をして當らしめぬ。己に奮戰漸く疲れぬる範君はいうで繁君の鋭鋒に敵せんや、其足拂を以て勝を制せられしも初陣の功名は敢て君が爲に毀

たず。白軍は陣頭今や奮進し來りし人をや誰と
かあき、

戸川文次郎氏

氏は夙に打物取つての驍名は隠れもかく而も江
戸子張り猛者聲は常に聽者れ絶快を叫ばしむ
るもの、場裡夫れ一枝の花かれや。其斯道に志

重ねしは白軍は勇卒、
森田作十郎氏

中山佐之助氏

が怨を呑んでの打死にやある。
勇勢更に加はるの長屋氏も、今長髓彦れ聞え高

永松 文一氏

すれ日尙ほ淺く、枝は固より紅の鷹見氏に一步
を譲るれ憾あるも、其態度の深沈ある氏遂に池
中の物に非ず、宜哉氏よく敵れ鋭鋒を抑へ引分

を邀ふるに至つては、氏遂に小外刈を以て榮譽
の戦死を遂げ給ひぬ。紅軍に奮つて起つ者は

中桐 虎炳氏

けに相揮いて退る、さりとて御手柄と云は

其人なり、劍客としての氏や堯名寧ろ戸川氏に
譲らざるもの、特り相模的氏が態度は、練習の

紅 長屋權太郎氏

過賞かは、更に兩軍新手の勇士は

重きを喜ばざるの致す所の、奮激遂に効なく白
を挫ぎ得て引分に終らしめしも亦是非あし。

紅 植村宇三郎氏

は二氏、軀幹力量共に伯仲とや云ひまさん、而
も其技は紅の白に勝る所萬々、紅が御得意氣の
足拂は遂に白の怨を招きしもれ固より然るべし

やにはに組むや疾く躰は重り倒る、而も紅は白

白 三谷 美種氏

の陥る所となり憐れ抑込に怨を呑で策の己に施
すべきなし。美氏今や奮氣一倍迎ふるは紅軍の

白 芝田 徹心氏

南 大 曹氏

あり、さりとて白面細腰の南氏勇勢なるく、に
慢る可らず、美氏一勝れ轍を踏んで再び敵を抱
き倒ると雖も、己に植村氏の敗を視て心爰に致

其鬚髯の老幼を問ふて以て技の老幼亦判ずべし
とならば、松山氏は夫れ老いたるの士が、始め
には足拂に六分の勝を制せられ、徹氏得意の眞
捨身は遂に氏の首肯する所とある。代らしめし
者は紅軍の

藤原 敏夫氏

すれ南氏は豈輕々しく敵の陥穽にうゝるものか
らん、能く其虚に入つて美氏の却て危きを見る、
而も大勢は遂に紅に歸するの、「一分の引分」の

あり、氏や其力素より徹氏に超る數等、徹氏此
に至つては又百計出る所を知らず、遂に氏か足
拂を避け能はざりき。

西 川 巖氏

は出づ、其技其力能く南氏に伯仲する者、得意氣
に測らんとして勉めたる足拂も氏屢々効なく、
兩士徐るに相揮し馬首を廻らして去る。

いでや怨敵御座んかれ、氣怯ばし給ふて可哀
い耻の目見給ふなど躍り出たる一壯漢は、

小野 連三氏

次で陣頭に顯はれたるは共に矮小白面の二好漢、

撞乎として兩躰横さまに倒ると見る間に、擲込
の功名は固より氏の期する所、更に奮起して迎
へし者を紅軍の

紅 松山壁太郎氏

高野 新吉氏

とす、吁已れに出で、已れに返るの憾、連氏は遂に新氏の抑込に首肯せしも訝かしや。シヤ物々、紅の腕立、刈倒さんと瞬く間に跳り出でたる健兒

池上 四郎氏

氏や果して何を頼める、曳々聲の相模的態度は余り感心仕られぬあり、危くも横捨身に入つては能く氏が御手柄とや賞めまさん

中山 清藏氏

一度出るに至つて氏は遂に其足拂に噎れ終ぬ。清藏氏亦今や白軍の鬯壯漢

栗本 貫一氏

を迎へては、氏が踴躍し來つて勝を一舉に歸さんとあめき叫けんで風動し來る鋭鋒に怯れや出けん、上四方に身を擁せられて復た遂に起たず、空しく時の至るを待つて打死ぞ給ひぬ。紅軍次で貫氏に當る者を

石田 福松氏

とす、貫氏今や初元氣に似氣もなく喘息漸く迫り疲れ出でたふん如し、徒らに縦横の技は能く風發を欺くも其氣復た遂に伸びず、石田氏や又貫氏を凌ぐの勇あきぞ奇し。二氏爰に相退いて兩軍は更に

紅 伊藤 眞雄氏

白 佐伯敬一郎氏

を其陣頭に走せて雌雄を決せしむ、由來佐伯氏は斯道に龍種の聞えあるもの、而も積年陸上レスのチャン名を戴きし氏が健脚は伊藤氏の遠く及ばざる所、起つて僅るに二秒其足拂は疾く敵を噎して、之を精悍の聞えも高き

杉本 勉 吉氏

を哂笑し迎ふ、横落の技やよく敬氏が鼻をひこつかせ其得意亦思ふべきのみ。然りと雖も亦氏に色は似て白く体は似ずして細やうある紅顔子

牛木新吉郎氏

の敏捷なるに當つては又敬氏の爲に惜む所、新氏の腰投は見事に定つて敬氏遂に噎る、白軍の陣頭

平倉 保市氏

出づるに至てや優しくも自得の歩を學んで保氏が軽捷なる真捨身に驚る。代つて突進し來りし白軍の一壯兒

竹花 武壽氏

湯本四郎右衛門氏は奮つて起ちぬ。新氏焉ぞ四郎氏に譲らずと雖も、如何せん細腰はよく其疲を癒やすによしあ

は出づ、格技は能く一步だも保氏に譲るあらざるも、由來保氏は肥滿の身重拾九貫余ありと聞ゆ、膂力亦之に準ずるとや、其武氏をして巧に操縦を得せしめざりしもの蓋し之あるが爲か。保氏は能く讓氏を噎して余勇猶未だ朽ちざるとするも武氏にして能く一倍奮闘を試みたふんに

紅 田宮 春策氏

白 村 田 讓氏

をして代らしむるに至る。讓氏亦永松氏に劣らぬ長大の軀幹、利へ技の操縦に巧あるは春氏の能く敵に能はざるもの、其真捨身は見事に入つて春氏をして肯せ退かしめ、次で紅軍の

は勝敗の數亦何ぞ必ずしも爰に至らざるに、汗時己に遅く、今は是非あくも二氏が身其楯に乗らずして歸陣するに至る

佐藤 男次氏

紅 阿部 善次氏

を抑込んで首掻き切り、

軀幹を以て比せば紅は矮小にして白は長大、其

技を以て較さんとならば迭りに兄たり難く又弟たり難し、賢氏一度怒つて善氏又遂に起たず、一足拂の呼聲は判者の口より迸り出で、驚面は壯兒

榎戸 利吉氏

亦如何で賢氏の勇勢に敵するものぞ、見る々々大外刈に刈られて墜る。紅軍は更に帛を厚ふ

小林 正旭氏

は代り起ちぬ。氏や運動家を以て任ずる榎戸氏、夙に運動場裡れ一名物と聞えし利吉氏、流石に其人の態度として敏やうに捷輕ある、然も今阿部氏を仆して勇は更に凜々を加へつる賢氏や苦戦といふもの僅前に分時、疾く賢氏が腰投は見事に定まつて利氏亦遂に受け損ず。

を推せり、四士を仆して尙ほ衰へるの氣配なき賢氏の饒勇、今や此勁敵に當つて能く鼓勇の勇あるや如何に、否云ふ迄もなく漸く將に氣息喘々たるは幾度の手を束ねて身退のんとしつるにても明かしく、以て正氏の得たりとする所のも

組まざるに何事ぞ格せざるに何の怯れぞ、我れ到底賢氏の敵手たらずと、澁々膝栗毛を繰つり給ふ、紅軍の

の而も賢氏の疲に入らんとして蹉躓し、遂に三氏引分の令と共に相揖す、遙かに憶ふ往年佐々木氏の五人倒の快絶を、今や吾人は賢氏が四人仆しの名と共に永く譽あるれ記憶に残さんとぞ、賢氏ある者幸ひに健在なれや。

阿部 元松氏

紅 神谷 秀吉氏

亦先見れ明ある哉、勉めたりと雖も氏呼に敵せず、哀れ榎戸氏と終を同ふして仆る。いざや三友の仇ぞと力まれし

白 伊 佐 壽氏

昨冬霜月の陣頭に雌雄を争ひし二氏は、今復た此陣頭に見參して一死を期さんとぞ、秀氏は當年大外刈の一搏に怨を呑んで仆れしもの、復仇的氏が攻勢嗚呼盛哉、然りと雖壽氏亦何ぞ其鋭鋒を挫くの勇なからん、秀氏勉めたりと雖汗遂に及び難かり、再び怨を呑んで今日は足拂に仆る。

背負投に最後と遂々。奮然蹴起今や紅軍の陣頭に名告を上げし一健兒は誰ぞ、往年五人仆の驍名を博したる

鼻高白面の好兒

佐々木久二氏

亦到底壽氏の敵たらず、醇氏能く練習の効は壽氏をして稍や苦戦の状を呈さしめし、壽氏其大外刈に入つて醇氏事已休矣。

は、萬目を風動し去つて肉薄し來る、今や昨冬の勇を鼓して來る、三氏の耻を雪がんとして來る、時や既に壽氏疲れに疲れ又敵を省みるの餘意あるなく、戦ふも僅かに三合身自ら陣中に退きし今是非かけれ。

福田 醇氏

寡勢ある源軍は今や清水、伊佐の二騎を失ひ余す所僅かに六騎のみ、究竟其安危のうゝる所や如何に、屋島の戦雲は曇々紫電を閃かし來る。

代つて出でたる猛者は、時習察に幽靈踊の幻劇を演ずるとて名夙に高かる慄悍の活潑兒、

次で起つ者は白軍の

植木隆太郎氏

高 橋 亨氏

其人なり、さりとては隆氏の苦戦も壽氏の首肯せざる所のもれ、哀れ瘦長の軀幹は見事壽氏の

なり、其技勝れりとはあらねど有繫に操縦の巧は能く佐々木氏をしてバテントたりと聞く腰投も入らしめず、一進一退能く其技を盡せしを、

然も技や遂に久氏に及びずして眞捨身に二分を制せられ八分の腰投は定まりて享氏終る。新に陣頭に進み出たる之も白軍の壯兒、

平澤象太郎氏

澤田堅太郎氏

も、象氏は三十秒にして堅氏僅かに二秒、共に久氏が得意の腰投に敢なき最後をぞ遂げ給ひぬ。海賊とやら山賊とやら聞くも恐ろしき異名を取らるゝ熱血の壯漢、

深澤新一郎氏

は濶歩して今や久氏に當る、新氏よく敵の銳氣を利用し見事其バテントを奪はんとして却て久氏の術中に陥りぬ。聞く新氏は勢の寡なるを見憤滿禁せず、強て病軀を驅つて遂に名譽の戦死を遂げ給ひぬと、新氏の奮ふに吝かりし事故なしとせず

とそはや白軍の參謀

江間 圭一氏

は悠然と打立れぬ、圭氏其姿勢の優勝は正に闘校無比、而も沈着敵を眼中に置かざるの面持は又以て氏の爲に喜ぶ所、久氏や到底圭氏の敵手たるに非ざるか、否々圭氏は久氏を見ると弟の如きも、久氏圭氏を見る必しも兄たりとせず。久氏にして銳氣初の如く、數度れ功名に能く疲れ出でざるの神あらば、又勝敗の數未だ知る可らざるもれありしならんか、惜氣もなく勝を奮はざるの敵に譲り、再び清水氏の譽を追ふて揚々幕に退きしは、切に氏の爲に惜み白軍の爲に喜ぶものありしならん。久氏に代つて我こそはと力み出でし猛者は

生野 團六氏

梨園の仇役の御名告の下に起ち給ひし氏や、軀の矮小にして而も敏捷の聞えある者、蓋し偶然には非なるり、今や圭氏に對して其精銳果し

て如何。泰然として山は如く丘の如く陣頭に唯雄を決し給ふは二氏よ、二氏は克々の宿縁ありとて見參する、往年二氏の喜怨今將に何所にか徘徊へるか、一寸一隙苟もせざる二氏の進退、圭氏巧に團氏を抑へんとして危く残り、腰帶斷ちしとて二氏爰に相並て起つや形勢は頓に一變して圭氏又初めの勇あるに似ず、團氏の愈攻勢なるに従つて圭氏切りに守勢を取る、昨冬は苦も亦く膝車に休して神速氣は全軍を呑むと造賞へられし圭氏、當年の勇今遂にあらず、刻一刻危かたんとしては残り、技出さんとして怯めるが如きものも幾回や、呼敵の虚に入らんとして已れ却て其虚を衝かる、團氏の足拂は己に圭氏の大負傷其眞捨身に襲はるゝや圭氏復た遂に終る。絶大の重任を負ふて白軍の參謀

山口 重作氏

今や嫣然陣頭に身を挺し來る、顧みれば源軍餘

す所既に近藤の一將あるのみ。疾風は枯葉を捲いて奔騰し來り、密雲は漸く殷雷を誘ふて陣頭の血塊は正に濃やのなり、將に之れ兇鷓骨を啄み逆狼血に狂ふの時。重氏が期する所胸中何等の愾氣や、往年敵將高梨氏と同舟にあるや、能く敵を塵殺し盡して絶倫の勳功を唱はしめし身は、よし昨冬は高梨氏に軍旗を奪はれて今や源軍の參謀と立つとも、猛烈の氣は尙ほ灼然として餘裕あるもの、呼當年の勇膽は已に沮喪し去つて又君は君の勇ありや。生野氏固より精悍なる可きの敵にはあらずなり、山口氏切りに攻勢を吝み給へるの怨は、近く足下に搖出て技遂に施すに由なく、無念引分と成て源軍は爰に大將の御出馬とある。

近藤他家雄氏

勇悍無双れ名聲は夙に校の内外に唱道せられて、然も氏が勁幹を爰に見ざる事や久し、今や一軍

れ安危は氏が健腕にかゝり、興亡は其強脚に絆く、刹那一閃大外刈の秋水は迸り出で氏遂に虜はる、奮闘の状さりては壯なれや。

すはや大敵ぞ油断すな、死すどてモ離れなと動搖めき亘る、幕を排して突進し來る少壯け勇者

大森 篤 次氏

漢は誰わふ

紅林 豊治氏

は走せ迎へて近他氏に當る、何何事の誹りぞ、山崎の敗將は不知小栗巢の郊端に在るを。さればとて氏は悉く大森氏に勝る所其技其力共に然るべしとは人も許し我も許すを、圖らざりき容は意の外に出で、近他氏固より弱きに非るも奉らん哉。

大森氏亦遂に慢る可らざるの敵手たらんとは、しうも大森氏は尙ほ後に鋭氣風發たる二將のあり、仆さん迄も疲らし呉れんと望は疑つて満心の勇を一臂に鼓吹するや、端なくも孤將を激して殊死奮迅、虚を衝き實を治むる一進一退、怒氣はささに天に沖き。之に於てか大森氏徒らに敵の勇を鼓して復た策のほどをすべきか

敗の數や明なるか非か。變幻縱横神出鬼没中心翼々として激闘數分、近他氏掃腰に入れバ紅豊氏の膝已に輪の如し、紅氏足拂を以て思はず彌次連を起たしむれば近氏が腰投に亦汗春を濕す、近氏今や息喘々、顛顛

には既に蚯蚓大の脈を搏つて小鼻の筋肉は時おろぬ痙攣を起し來る、然も氏は進んで殺さずんば自ら死せざる可らざるの位置にある人、紅氏亦其技如何に巧に繰縦宜く其態度に照應するも、其矮小の軀幹は瘦衰の怨を呼んで技は遂に出でず。紅氏の後に在て搏撃もどおーどや思ふ驍將

紅旗の風に翻へると。

高梨氏も、今や流石に鷹隼の將に大に搏たんとするや一時銳を斂めて其翼を整ふが如く湛然として其饒舌を鎖し、獨り慧眼切りに二將の足に幸ひに吾人の妄評に首肯するや否や。伴ふて、半勝一瞥又更に他意なく、場裡は水を打てるが如く又聞として聲あし。

一見其相合を覺る重忠の明あらねども、吁誹は遂に其實をなして奇禍は將に白旗の下に搖ぎ出なん。 六月上浣 露子ゝるす

なん、炯々たる師の眼光は能く之を看破し盡せし物の、果然引分の絶叫は場裡の鬨を破つて耳

船妻や間を鐘のひびく

也有

投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたじ
- 一 長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せざ
- 一 雜誌上より雅號のみを記載することを許せども姓名と必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありさじ勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くもの一切掲載致さざるべし

明治三十一年十一月十六日印刷
全 年十一月二十日發行

編輯兼發行者

松村大吉

印刷者

佐々木惣一

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

活版合資會社

金澤市高岡町三十四番地

金澤市長町川岸五番地清水祐世方

金澤市川上新町三丁目二番地松本凌方

